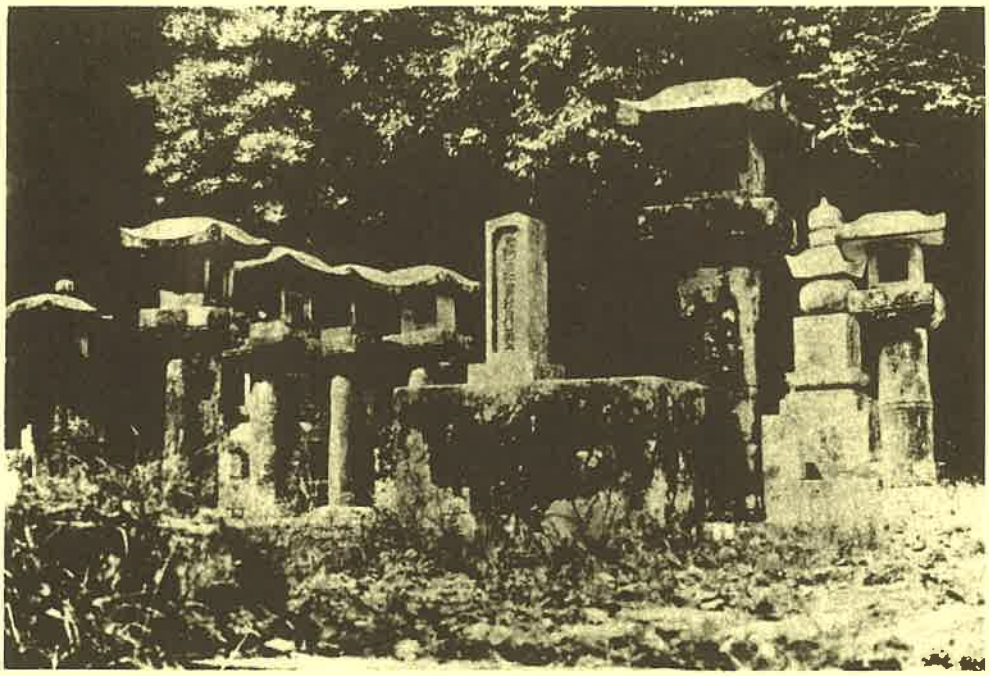
高鍋町の文化財第五集

# 高鍋の史跡



高鍋町教育委員会

# 目次


□史跡　頁

はじめに……1
1、明倫堂跡……2
2、晩翠学舎跡……4
3、高鍋町お仮屋跡……6
4、史跡としての高鍋町役場敷地……7
5、石井十次と馬場原朝晩学校……8
6、上江お茶屋跡……9
7、もひろげお茶屋跡……10
8、萩原お屋敷跡……12
9、刀工鍛冶場跡……14
10、秋月墓地……15
(1) 大龍寺跡の秋月墓地……16
(2) 安養寺跡の秋月墓地……20
(3) 龍雲寺跡の秋月墓地……22
(4) 三好善太夫一族の墓……24
11、土持墓地……25
むすび……29

□碑

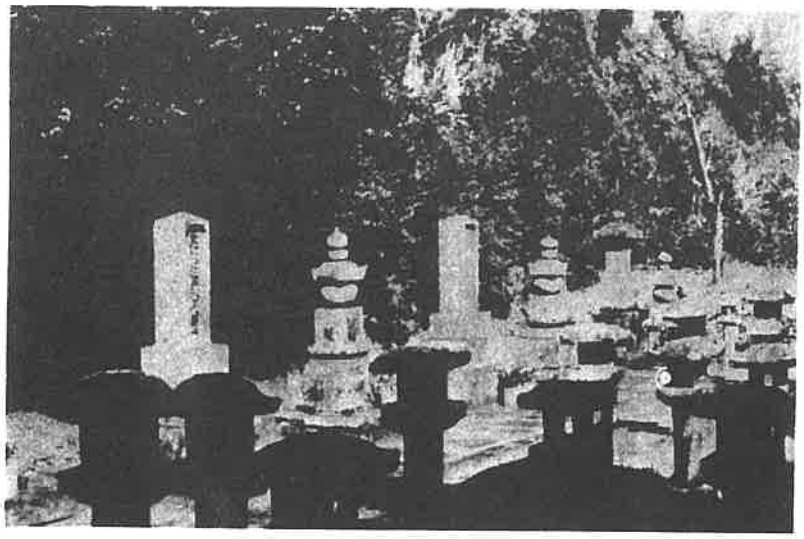
(1) 明倫堂記碑……30
(2) 清観公碑……32
(3) 島田小学校跡の碑……35
(4) 高鍋小学校跡の碑……35
(5) 美智子妃歌碑……36
(6) 種樹公漢詩碑……36
(7) 安田尚義歌碑……37
(8) 芭蕉句碑……37
(9) 石井十次詩碑……38
(10) 石井十次顕彰碑……39
(11) 石井十次誕生地碑……39
(12) 四哲碑……40
(13) 殉難招魂之碑……40
(14) 丁丑戦亡記念碑……41
(15) 平林忠恕墓碑……41
(16) 坂田稲太郎記念碑……42
(17) 長友勘右衛門記念碑……43
(18) 本田親潅漑功績記念碑……43
(19) もひろげ神社跡碑……44
(20) 人民牛馬供養碑……44
(21) 畜魂碑……44
(22) 軍馬招魂碑……45
(23) 家畜の碑……45

(24) 精米所跡の碑……45
(25) 距離元標……45
□名勝
1、琴弾の松……47
2、老瀬観音……48
3、高鍋大師……48
□天然記念物……50
高鍋大楠……50
□胸像
斉藤角太郎胸像……51
柿原政一郎胸像……51
石井十次鋳像……52
あとがき……53
□池堤
一、はじめに……53
二、谷坂堤……53
三、山王長法寺堤……54
四、持田檜谷堤……54
五、雲雀山堤……54
□用水路……54
一、大平寺畑田用水路……55
二、広谷用水路……55
三、筏の火防用水路……56
あとがき……57

# はじめに

高鍋町文化財要覧に史跡として挙げられているのは、秋月墓地など一〇箇所であるが、史跡として数えてよいものはその外にもなおたくさんあるであろう。しかしここでは右の外に一箇所を加えて、その概略を述べるにとどめたい。

ここにとり上げた史跡は大部分は近世以降のもので、わずかに土持墓地だけが中世のもので、それ以前のものはない。土持氏に関係のある小浪川の合戦や毛作原の戦い等が二三の文献には見られるが、その場所を示す史料に乏しく、中世以前となると、むしろ説話か、神社仏閣の縁起等として記した方がよかろうと思い別な機会に譲ることとした。



秋月墓地（大龍寺跡）

# 1　明倫堂跡

農業高校運動場西北隅、高鍋大クスの下に石碑がある。

（正面）　明倫堂址

（背面）　明倫堂　高鍋教学之本源也

安永七年藩主秋月種茂創之

この碑は明倫堂の位置を示すもので、昭和三〇年、農業高校初代校長落合寅次郎が建立した。文字は柿原政一郎翁の書である。

(イ)創立当時の明倫堂

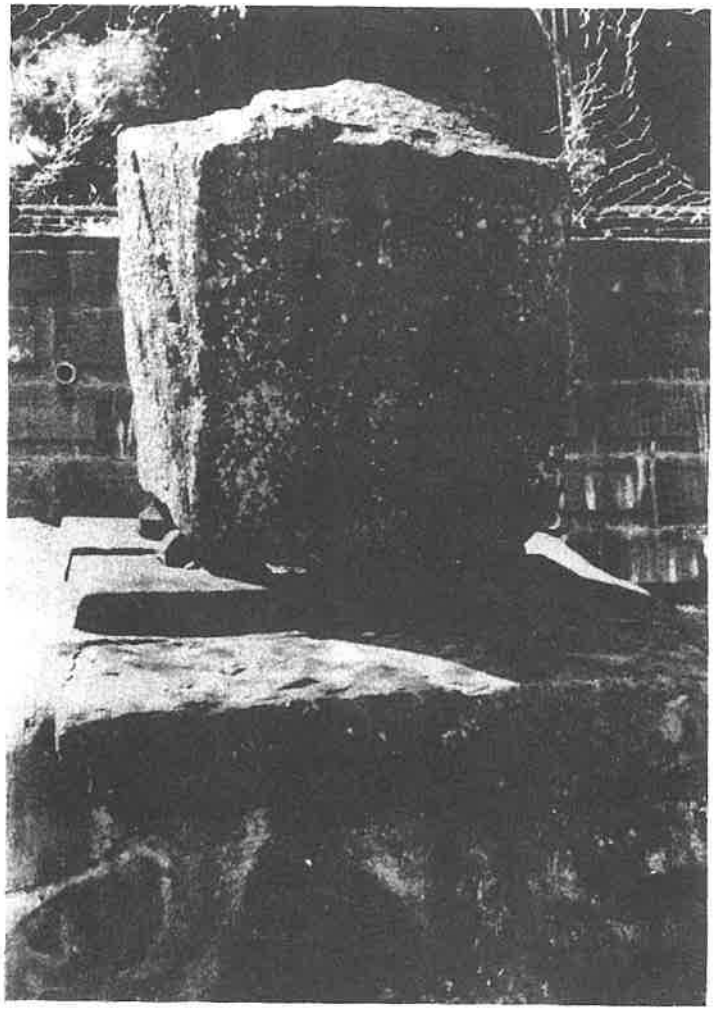
創立当時の明倫堂は、この碑のすぐ南、運動場の西北隅に立っていた。大手門（農高正門の南）から大クスに向う大手通りが、島田門から蓑崎門へ行く通りと大クスの下で交るところの南の屋敷を「角の屋敷」と呼んだ。現在の農業高校の運動場の西北隅で、運動場の四分の一の広さが明倫堂の敷地であった。明倫堂は南北に長い東向の長屋造りで、正門は東側にあった。

ここは、元、藩の米倉があったが、種弘公(五代)が享和四年（一七一九）その一部に学問武芸の稽古所を開いた。種茂公（七代）の時、千手八太郎の建言によって独立した学校を建設することとなり、安永六年六月着工し、翌、安永七年（一七七八）二月二四日竣工し明倫堂と名づけた。稽古改役（管理責任者）に河辺弾右衛門直貞、師範（後、教授）に財津十郎兵衛吉恵、千手八太郎興欽、山内冨太郎貞昌の三人が任命された。明倫堂には小学と大学とがあり、小学を行習斉（ぎょうしゅうさい）・大学を著察斉（ちょさつさい）といい、行習斉は八・九歳で入学し、著察斉は行習斉を卒業した者が十四・五歳で入学した。

嘉永六年（一八五三）寄宿寮切偲楼が設置され、初め藩費生三名、志願者六名と定め、著察斉の学生から採用した。しかし次第に増加したので定員五〇名とした。

その後幕末になり時代の要請に応じて改革が必要となり、就学者数も増加したので、種殷公（一〇代）の明治三年、大手通の北側（現在農高校舎の位置）に移転拡大し、教育内容も従来の儒学の外に医学、洋学、兵学、国学を取入れた。

明治六年藩校廃止となり九五年の藩校の歴史を閉じた。その跡には、明治六年島田小学校、明治一二年高鍋学校明治二七年公立高鍋学校、明治三六年児湯郡立高鍋農学校、昭和二三年には高鍋西中学校として用いられ、昭和二七年宮崎県立高鍋農業高等学校が設立された。



明倫堂跡の石碑

## 2　晩翠学舎跡

宮田の高鍋城堀沿の道と、その東の通りの間の北より四軒目の屋敷が三好退蔵の元屋敷で、田村義勝の漢学塾晩翠学舎のあったところである。

明治十年西南の役後の、物心両面の荒廃の中で、帰すうを失った青年の教育の極めて重要なことを思った田村義勝は、その門に集る青年達に漢学塾を開くことを呼びかけた。明治一一年八月二二日、柿原季知、小田知行、恵利今朝吉、矢野大四郎、柳数太郎、手塚園次郎、内田孝忠、山田重矯、河野寅次郎、津江広保、荒川盾夫、永友文吉郎の一二名が会合し、田村先生を舎長とし、柿原季知と小田知行が執事となり、田村先生の実弟三好退蔵の宮田の留守宅を塾舎とし、全員寄宿してせっさたくますることを約した。指導者には、田村先生の外に城勇雄先生も招くこととした。

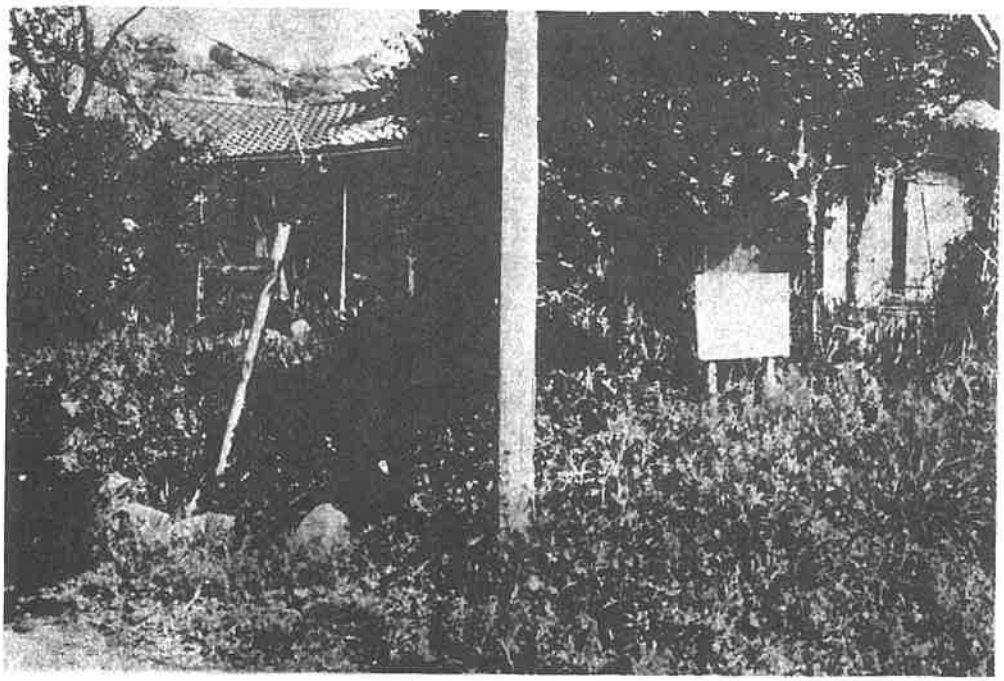
塾名は、城先生が庭前の二本の老松にちなんで晩翠学舎と名付け、その由来を、美しい花は早くしぼむが、松は晩くまでみどり深く、大志の容易に達し難い姿にも似る、この塾に入る者は勉学に励み、将来の大成を期すべきだと記して塾生の奮起を求めた。

最初は田村先生が文章軌範、城先生が論語を講じ、十八史略は塾生の輪講とし、後に新入生のために日本外史、優秀なものに左伝の輪読、輪講を行い、その後、唐宋八家文、元明史略、孟子が講ぜられた。舎生は平素の成績と定期の試験により、一等より五等に等級を定め、その他は等外生とした。

舎生は次第に増加し、高鍋、上江、木城は勿論、川南、都農、美々津、延岡から、穂北、妻、都於郡、佐土原、本庄、木脇、遠くは福島地方からも来り学んだ。学年の制度はなく、一・二年で退舎する者、上京する者、数年も通学する者もあった。

創立より六年後、明治一八年、高鍋学校の漢学部として吸収廃舎されるまで、荒廃の時流に押し流され易い青年に、方向と光明を与えたことは、高鍋の教育史上に特記すべき功績であった。この門に学んだ者は一一六名に及び、世によく知られる人を挙げると次の通りである。

石井十次　石井善隣　柿原正一　黒水長平　神代勝文
城　重雄　水町　元　一木侗四郎　則松松太郎
泥谷良次郎　武藤　廉



晩 翠 学 舎 跡

## 3　高鍋町お仮屋跡

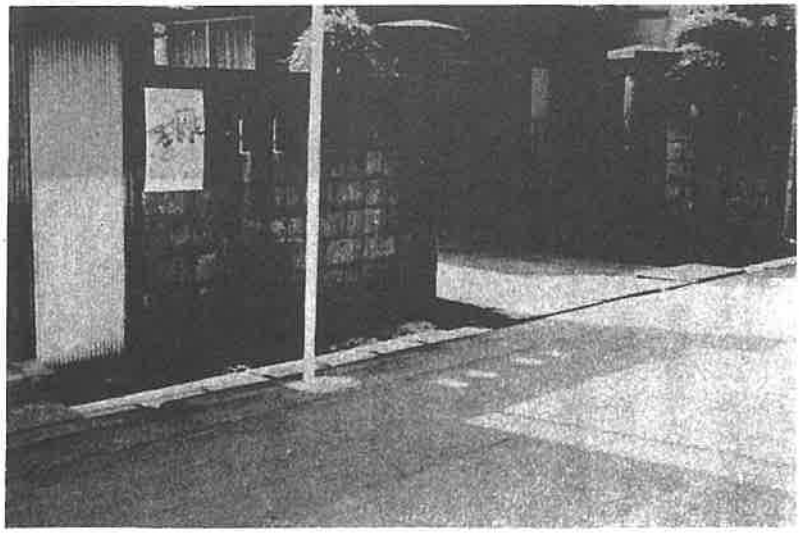
高鍋町大字高鍋町五四二番地（十日町）、堅筏入口の南の角屋敷、現在、則信商店外数氏の居住するところが高鍋町お仮屋跡である。

高鍋町お仮屋は、高鍋藩の表向きの客人の接待宿泊場所で、いわば迎賓館に相当する。従って高鍋城の大手通りの入口に設けられたのである。

記録に初めて見えるのは、本藩実録巻之五、元禄六年（一六九三）三月に「高鍋町お仮屋ご普請始る」とあり、同年一二月二六日「お仮屋普請出来、屋敷半ヶ畝並に後の田取入れ、此の間より囲ひ広く相成候」とあるから、以前からあったものを改築したものであろう。

それ以来、天草代官、日田代官、富高手代、その他の幕府の上使が訪れたり、幕領巡見使が通行したりする場合の宿泊接待、または他領の正使の宿泊接待の場所として用いられた。また、美々津出身で広瀬淡窓の門に学んだ日高明実（耳水）を明倫堂教授として召出された当座はここに住わされ、明治三年大阪より招いた皇学教授名波大年もしばらくはお仮屋住いであった。特別待遇ということであろう。

明治以後は、昭和一三年（一九三八）高鍋町と上江村とが合併するまで町役場として用いられ、その後は、役場と同居していた高鍋信用組合、および高鍋町農会の事務所が存続し、昭和二六年則信氏等に払下げられたのである。



## 4　史跡としての高鍋町役場敷地

町役場敷地を史跡として見ると概略次の如くである。

(1)　**高月寺跡**

本藩実録巻之一によると慶長一〇年（一六〇五）江戸幕府の参勤の始まった年の一一月「伏見にて富士灰の内より木像一を得たので高鍋城の鬼門（東北）に鷹月寺を建立して安置し、後、高月寺に改めた」という。初代種長公の時で、当時の信仰により城の守護の寺院として建立されたのである。初め円通山高月寺といい、天保ごろは大聖山高月寺日光院と言う真言宗の寺院であった。開山は清浄院真盛である。明治二年（一八六九）五月、廃仏毀釈によって廃寺となるまで二六〇余年間、高鍋藩の祈祷所として重んぜられ、寺領三七石五斗が給せられていた。

(2)　**兵賦局跡**

高月寺が廃寺となると、従来の武道稽古所が時勢の要求によって兵備全般をつかさどる兵賦局となりここに移ったが、明治四年七月一四日廃藩置県により廃止された。

(3)　**士族授産場跡**

兵賦局廃止後、農地となったが、明治一七年四月、大字上江字平原の人、平林忠恕が同志とはかり、養蚕、製糸、機織の技能を授ける士族授産場を新築し、推されて頭取りとなり、取扱人竹原祐吉、岩村真鉄と共に企画経営に当り、幾多の難関に遭遇するも屈せず養蚕業発達を促進した。忠恕は明治二三年、病を得て辞職し翌年没した。授産場は高鍋製糸株式会社になった。

(4)　**高鍋製糸株式会社跡**

明治二三年三月、授産場は株式組織に改め社長に平田宗雄が就任した。取扱人は田中兵太郎、石井習吉であった。二代目社長は石井十次、三代目は柿原正一であったが大正の世界的不況のため大正九年休業した。その後は次の通りである。

(5)　**片倉製糸株式会社**（大正一一年四月）

(6)　**産業組合日向蚕糸社**（大正一二年三月社長高橋正照）

(7)　**片桐製糸株式会社**（昭和三年四月）昭和一〇年ごろ廃社となる。

(8)　**高鍋町役場**（昭和一七年）となり現在に至る。

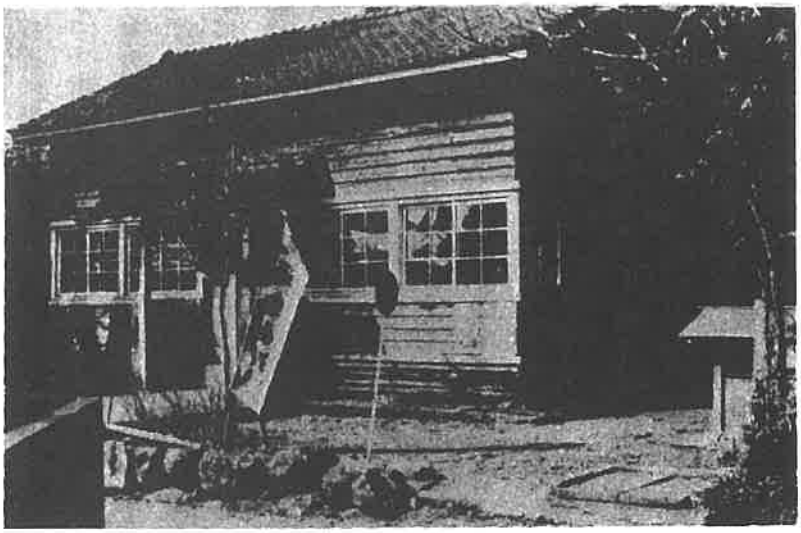
## 5　石井十次と馬場原朝晩学校

孤児の父石井十次は慶応元年（一八六五）四月一一日大字上江字馬場原に生れた。父は万吉、母は乃婦子。

その生家の南約一〇〇メートルの天神社の拝殿が、石井十次の馬場原朝晩学校跡である。

石井十次は明治一五年、岡山県甲種医学校に入学したが、同一七年夏季休暇に帰国の船中にて新島襄の同志社大学設立趣意書を読み、教育の必要を痛感し、一つの教育会を設けることを決意して帰国した。七月二四日、村の青年旧友が帰郷の彼の歓迎のため盆踊りを催したが、踊り半ばに彼は突然三味線を打ち折り、今後盆踊りを全廃し、馬場原村の教育に全力を注ぎ人物養成に熱中せよと叫んだ。その後、村内一同の賛成を得て、馬場原教育会を設立し、八月五日発会式を挙げた。十次二十歳の時である。同会の事業は遊学生の県外派遣と読書教授、及び書籍の貸与の三つであった。初めは渡辺浅治宅にて読書教授と書籍の貸出しの二つを始めたが、やがて村の鎮守天神社の拝殿を修繕して馬場原朝晩学校と称し、八月一六日開校式を挙行し、会則を作り、会員有志は金穀をきょ出して県外に遊学生を派遣し、学齢子弟に朝夕読書の教授を始めた。校長は森友治、外に世話人二名を置いた。十次はその九月、暑中休暇を終って岡山に向う時、三名の県外遊学生を同伴し、自分の学資を割き、なお不足する学資は「あんま」を開業して授助した。

この教育会、朝晩学校は、明治二〇年九月、岡山孤児教育会が設立され、校長森友治が、その教育を担当するに至るまで四ヶ年間継続したのである。



馬場原朝晩学校跡

## 6　上江お茶屋跡

上江お茶屋は第四代藩主種政の隠宅であった。大字上江の長法寺（長宝寺）堤と高鍋より木城に至る県道との中間に当るところにあった。ここは山王の台地の東の端で、その東は一段低く、小字でいうと鷲谷より長法寺下に続く水田で、水田地帯の東北は更に低く、小丸川の清流が流れ、眺望のよい地点であった。当時の小丸川は青木の東のはずれから川田の北の端、馬場原に沿うて流れいて、記録によると、元禄十二年正月二五日馬場原下に川除（かわよけ）が出来ている。種政は早くからこの場所が気に入っていて、隠居のずっと以前からお茶屋を作って度々やって来ている。初めて記録に見えるのは、隠居の七年前の宝永元年（一七〇四）三月九日、拾遺本藩実録巻之四に

上江お茶屋番久保新左衛門へ仰せ付けられ候。屋敷一反に二間に三間小屋作り下さる。

とある。翌二年八月八日には、

上江お茶屋囲中に泥谷次太夫被官二人居り申し候、外に移り候よう家移り料白銀一枚ずつ下さる。

とある。種政は宝永七年八月二日、五十三歳で家督を種弘に譲り、本式に隠宅を作ることになり、同月十四日に、お茶屋をお屋敷に改め地鎮祭が行われ、十二月落成し七日に引越が行われた。種政からは奉行、棟梁初め雑役の人まで祝儀が出された。新藩主の種弘は孝心深く、父の健康を気遣い医師浜崎良安をお屋敷の南後に屋敷二反を与えて住わせ、久保次郎助、飛田藤助にも近所に屋敷一反ずつを与え、間与作には長法寺囲の内に屋敷一反を与えて勤めさせた。これらの人の子孫は今も青木附近に住んでいる。その後藩主父子の睦じさは拾遺本藩実録巻之五の随所に見られる。種弘は参勤交替から帰って来ると直ちに隠居所を訪れている。父子一緒に川南山元の獵場へ出かけているのも度々である。享保元年閏二月二六日も父子連れだって川南山元へ獵に出ていて種政は目まいが起って倒れ、翌二七日亡くなった。恐らく脳溢血であったのだろう。種政は大龍寺へ葬られ天祐院殿という。

種政に仕えた岡本雲八は信仕厚く用人に登用され、引き続き上江屋敷の管理責任を命ぜられ、月に一・二度見回り番人を督励し庭も荒れないようにし、飛田藤助、久保次郎助は元の通りお屋敷番を命ぜられ、浜崎良安は城下へ屋敷をもらって引移ることになった。

## 7　もひろげお茶屋跡

もひろげは宮田川河口近くの地名で、現在の高鍋青果市場の敷地の西南部から、西の隣接地一帯をさし、もと高鍋藩主の別墅があった。お茶屋とは、「茶の湯の室」ということで、藩公の茶会の場であった。

もひろげという地名は、毛比呂毛、茂広毛、藻広毛などと書かれ、比木神社の祭神、福智王伝説による地名説話に基づいている。福智王が百済の戦乱を避けてこの地に来り、宮田川の河口港古湊から初めて上陸した時、海水にぬれた鞍を干したところを鞍掛け（南九大への登り口）といい、裳を広げて干したところを「裳広げ」といったという。「裳」は昔、腰から下にまとった「ひだ」のある衣をいう。一説には「帆ひろげ」で舟の帆を干したともいう。そこに福智王を祭る毛比呂毛神社を建てたが、その場所が高鍋青果市場の南、宮田川の南岸で、祭典等に不便なところから明治になって中鶴屋敷に移し、元のところには則松喜又が発起して昭和五年一二月茂広毛神社跡の記念碑を建てた。神社の創立時は明らかでないが、永享一三年（一四四一）田部姓土持金綱が再興している記録がある。

もひろげお茶屋が記録に初めて見えるのは、本藩実録巻之五、元禄五年（一六九二）三月五日、四代種政が茂広毛お茶屋に行った記事である。ついで翌年七月一九日、河野七郎兵衛と八田彦左衛門という二人の奉行が殿様に御馳走を差上げた夜、残らず焼失し、同九月一日再建せられ、藩主が家老や奉行の相伴で落成祝をし、建築に携ったはしばしまで酒を贈った記事がある。

それ以来、藩侯と家臣のレクレーションの場であった。ここを最も善用したのは、高鍋藩の黄金時代を現出した七代種茂であった。種茂はその治世の初から中期は倹約を旨とし、財政を引き締めぜいたくを戒めたが、藩の財政の充実につれ、政策にゆとりを持たせ、このお茶屋に能舞台を造り、広く庶民に解放し、百姓、町人、水主にも能楽を観賞させ、あるいは蚊口踊とか、岩洲踊とか、比木の水神踊とかを藩侯にお目にかける催しがしばしば行われたり、また足軽の武術の上覧も行われた。その記事。

○藻広毛ニテ能コレアリ。徒士以上妻子マデ見物御免
（天明五年）

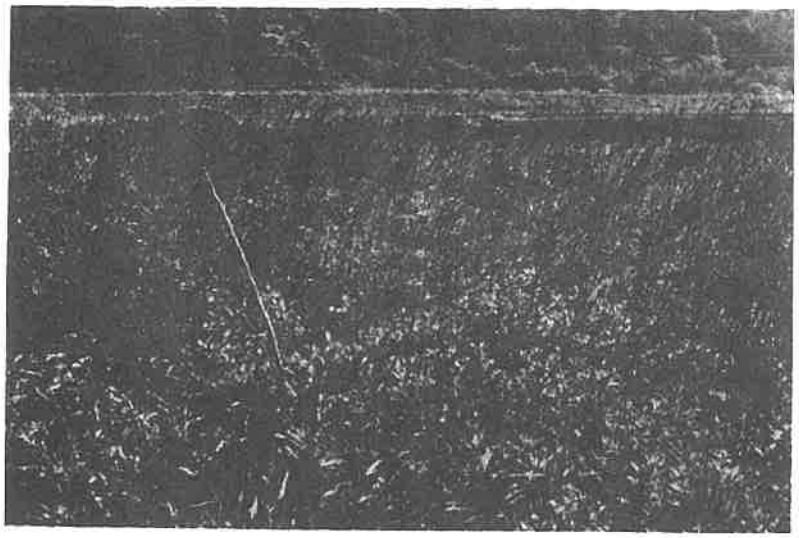
○藻広毛ニテ足軽中弓鉄砲棒捕手上覧（天明六年）

○町踊藻広毛ニテ上覧。役人中並ニ家内勝手次第
（安永二年）

○日置村百歳ノ老人清之進ヲ喚ビ酒肴下サル（安永四年）

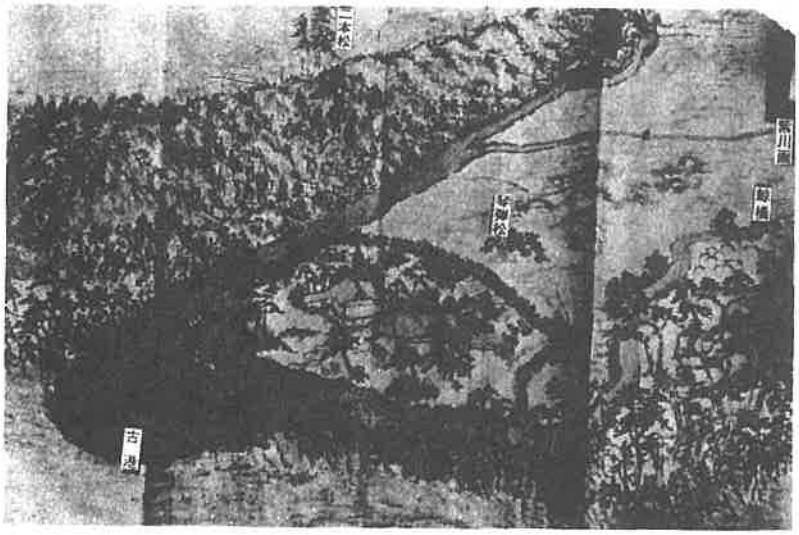
○町家ノ者ノ駆馬上覧（安永七年）

その後も様々に用いられたが、嘉永二年（一八四九）一〇月二八日、能楽が行われ、町・浦・津の庶民へ観せたのを最後とし、その後は幕末多事園遊に用いられることはなかった模様である。



もひろげお茶屋跡の現状

山名紫川の描いた「もひろげお茶屋」一帯の絵。山名紫川は高鍋町小丸に眼科医院を開業していた人で勝重といい、名医といわれた人。紫川画史（日記）一〇冊が残っている。




もひろげお茶屋一帯

## 8　萩原お屋敷跡

萩原お屋敷は三代種信の隠居所であった。

国道十号線に懸る高鍋大橋の南詰から堤防を西に二〇米ほど行くと、堤防のすぐ南下に茶の木を植えた二〇坪ほどの三角形の屋敷跡がある。そこが萩原お屋敷の跡で、お屋敷はそこから堤防を越えて河川敷に広がっていた。東の方は十号線越しに稲荷神社があり、西の方には高鍋高校、町営球場がある。この辺一帯は字名がお屋敷である。

種信はいわゆる上方下方騒動という高鍋藩最大の事件であったお家騒動の後始末を、その豪邁な性格から果断に処置し、よく藩政を建直したのであったが、外交的手腕にも優れていたらしく、幕府の要路者との交際も多く、皇居の造営に携ったり、勅使や院使の接待役を四回も勤めたりした。当時の幕府の閣老に牧野・大久保の二人があり、牧野は元旗本であったが、或る時種信を訪れた。種信のところには丁度客人があり、牧野もその席に連なったが、その時の種信の取扱に対して深くふくむところがあった。牧野は後に宗家を継ぎ幕府の閣老となったが、種信に対しては事毎に冷遇した。そのため柳営出勤の際も諸侯は牧野を憚かって種信に近付かなかった。その為め種信は柱によりかかって瞑目して坐し、遂にそこを佐渡柱と称するに至った。種信は佐渡守であったからである。徳川の御三家の一つ、尾張侯は秋月家と姻戚であったが、これを聞いた尾張侯はことさらに殿中で「佐渡殿久しぶりでござる。時には遊びにおいで下さい」とことばをかけた。当時御三家と親しく語ることのできる諸侯は極めてまれであるところから、諸侯は驚き、種信に対する態度を改めたという。しかし牧野某とは事ごとにうまくいかなかった。殊に種信の末子織部(勝親)が信州長沼の城主佐久間家の養子となり、五代将軍綱吉の逆鱗にふれて改易となり、陸奥の二本松に配流せられると、幕府は種信にも閉門蟄居を命ずる苛酷な処置が取られたのもそのせいであった。そればかりでなく兎角冷遇された。これを憂慮した老中大久保加賀守忠朝が密かに種信を私邸に招き諭すところがあって退隠を決意し、元禄二年二月三〇日、家督を四代種政に譲った。年五九であった。種信の退隠については本藩実録には僅かに四行書くのみであるが藩史一班に詳しい。

諸侯は引退すると江戸に住むのが普通であったが、種信の場合は以上の事情から高鍋に帰ったものと思われる。それから一〇年、藩政の後見のほか能楽を楽しみ、隠居

所に能舞台も設け度々能を催し家臣と共に楽しんだが、元禄一二年七月二七日正午になくなった。歳六九。亡くなるその朝隠居所台所の塀ぎわに切腹している者があった。見届けると矢野善兵衛という侍であった。種信の病の篤いのを気使い乱心したものであろう。人々はいたく心を動かされたという。

葬儀の後、手塚喜五郎外五名が種信の死を悲しみ落髪出家して菩提をとむらった。御屋敷の寝所跡には木を植え石を集め牛馬寄らざるよう致し置くべく仰出されたと記録されている。

# 9　刀工鍛冶場跡

大字北高鍋字道具小路一、二三七番地、岩下英氏家にある。この辺は通称鍛冶道具小路という。

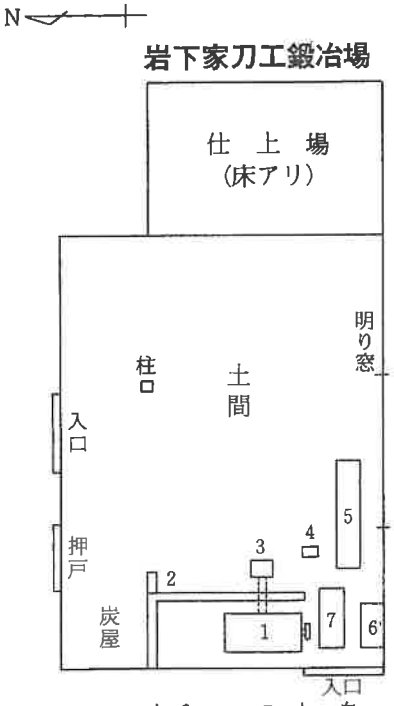
鍛冶場は面積三八・四一平方メートルの瓦葺。現在は半分は農機具倉庫として使われているが、半分の主要部分にはフイゴ、火防ぎ壁、火床、金敷、水舟、道具棚が往時のまま大切に保存されている。道具棚には元づち、大づち等の各種金づち、大小各種の火箸、ヤスリ、鉄カンナ等数十種の刀工具一式の外、刀身となる玉はがねも保存せられている。その当時は大部分が土間であったが、東側の廂の部分だけが床張りで、刀の仕上げ場であった。屋根の瓦の下葺が竹を割って板状にしてかずらで締めてあるのも往時の造作法を示している。その外同家には刀工の免許状、焼刃の秘伝書等の古文書も多く残っている。

また、寛政の三奇人のひとり高山彦九郎が寛政四年（一七九二）二度にわたって高鍋にやって来た際、岩下家を訪れて短刀を造ってくれるよう頼んだことをその筑紫日記に書きしるしているのも興味深い。

高鍋藩のお抱刀工師は三家あり、いずれも岩下姓であった。岩下俊一郎家、岩下源八家、岩下英家である。天正一五年（一五八七）秋月種長が高鍋藩に移封された時、いずれも筑前からそれに従って移って来たのである。

岩下俊一郎家は俊一郎氏より九代前の盛久（通称仁吉）が最も著名で、天明六年（一七八六）大覚寺門跡より金剛日向守の受領の称号と、一六葉の菊紋を刀のナカゴに切ることを許されている有数の刀工である。

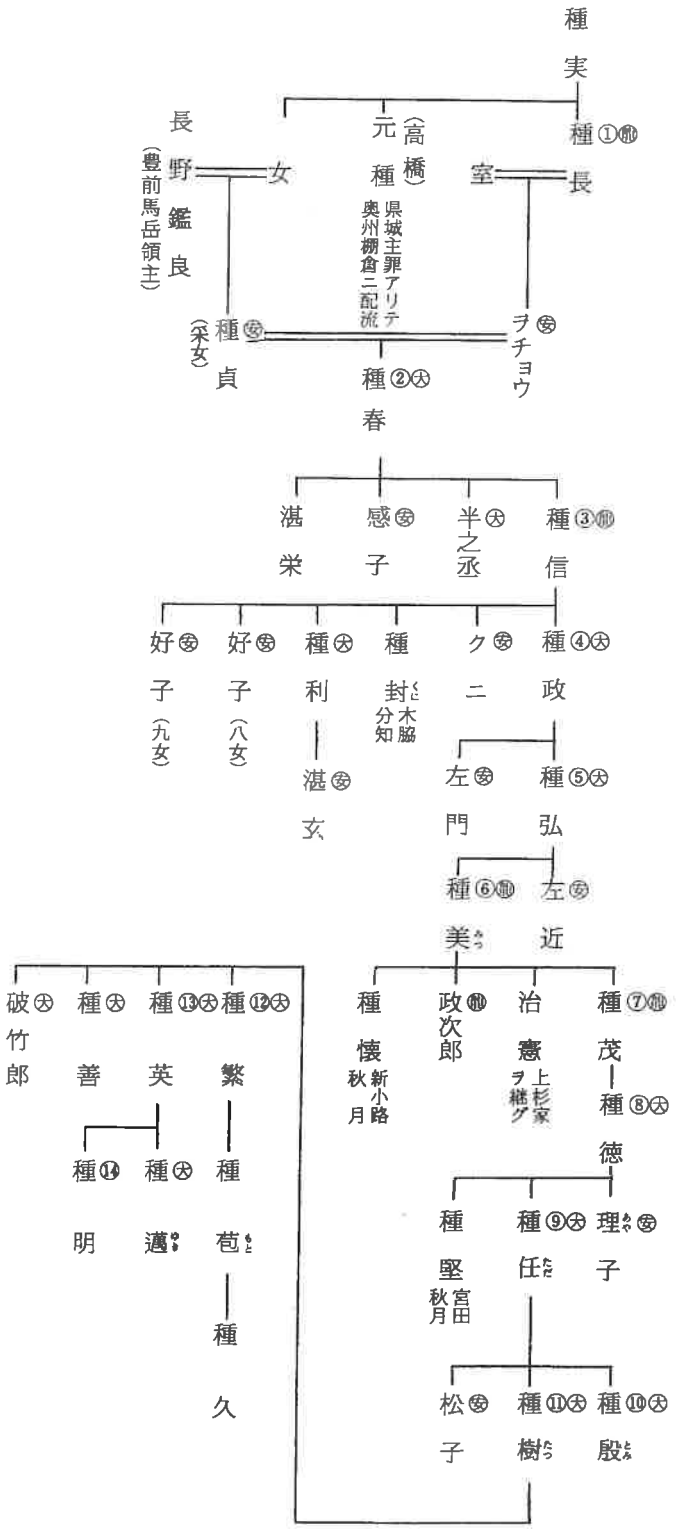
岩下源八家は岩下英氏宅と道路をはさんだ東隣に向い合っていた。昭和一五年源八氏が没すると嗣子がないため今では英氏がその祭祀を継いでいる。拾遺本藩実録巻之五によると、五代幸右衛門盛昌が宝永七年（一七一〇）三五歳で病死すると実子盛芳はわずかに一〇歳であったため、祖父が後見し、門人の神田甚助盛成が代役として藩役を勤めたので幼年ながら家督相続を許された。その後盛芳は盛成の多年の恩義に報いるため彼に岩下姓を贈った。これが岩下英氏の系統である。



# 10 秋月墓地

高鍋藩主秋月氏の菩提寺は三寺あり、いずれも町役場西の台地斜面にある。南から大龍寺、安養寺、龍雲寺で明治初年の廃仏毀釈により寺跡だけがあり、境内には歴代藩主と一族の墓の外、歴代の重臣の墓がある。昭和四七年四月町文化財に指定された。

## 秋月系譜と墓の所在



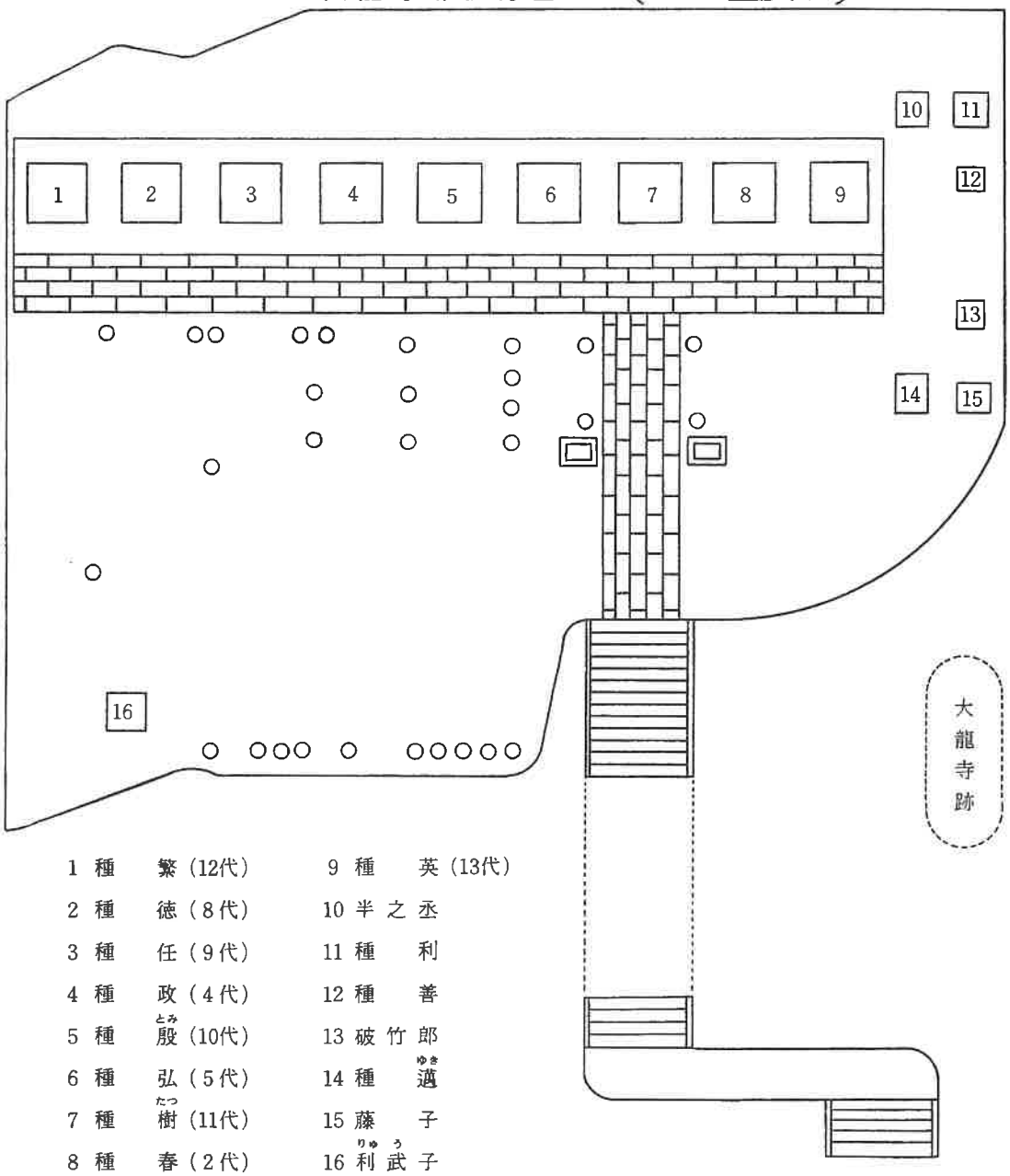
## (1) 大龍寺跡の秋月墓地

慈雲山大龍寺　禅宗　臨斉宗。

秋月氏の祖春実から二〇代目の種朝の法名を「大龍寺殿古潭浄瑩大居士」と言い、文明一八年（一四八六）筑前国秋月（福国県甘木市秋月町）鳴渡山の谷の奥に「種月山大龍寺」を創建したが、秋月氏が高鍋に移った後、万治三年（一六六〇）二代種春の追善のため、三代種信が移し建てたものである。本尊は釈迦文仏、元禄四年四代種政建立。外に観世音と達磨大師の仏像があり、種信寄進の鐘楼もあったという。開山は高源玉岑大和尚。寺領百石。明治初年廃仏毀釈により廃寺。藩侯墓に上る階段の右の平地が寺跡。

大龍寺跡の秋月墓地

## 大龍寺跡秋月墓地　（○ 燈籠 ▭ 手洗）




1 種　繁（12代）
2 種　徳（8代）
3 種　任（9代）
4 種　政（4代）
5 種　殷（10代）
6 種　弘（5代）
7 種　樹（11代）
8 種　春（2代）
9 種　英（13代）
10 半之丞
11 種　利
12 種　善
13 破竹郎
14 種　邁
15 藤　子
16 利武子

①種繁　碑銘　子爵正五位秋月種繁墓

（12代）　明治二三年八月九日卒（享年三三歳）

略歴　種樹長男　謙次郎　子爵　明治一四年四月家督　室チク伯爵大村純雄二女　後室上杉弥五郎妹コマ（長男種苞）。

②種徳　碑銘　泰雲院殿前城州大守実山宗真大居士

（8代）　文化四年一二月二一日卒（享年四五）

略歴　種茂長男　黒帽子　兵部　山城守　宝暦一三年八月一八日生　天明八年一一月七日家督。仁政を布き農政に力を注ぎ社倉条目を定め武芸を奨励し講武原を開く。室セイ津和野城主亀井能登守女。後室ヤス信州松本城主松平丹波守光和女。

③種任　碑銘　俊徳院殿前筑前大守寛道宗裕大居士

（9代）　安政三年六月一〇日卒（享年六六）

略歴　種徳二男　栄三郎　佐渡守　筑前守　寛政三年九月一五日生　文化五年二月一七日家督藩主行列を回復し二本槍とす。室アイ因州鳥取城主松平因幡守斉稷養方伯母。後室ミサ播州龍野城主脇坂安董女。

④種政　碑銘　天祐院殿前長州太守慶嶽宗善大居士

（4代）　正徳六年閏二月二六日卒（享年五九）

略歴　種信二男　万作　兵部　山城守　長門守　万治元年五月一五日生　元禄二年二月三〇日家督。弟種封木脇三千石分知。農政に力を注ぎ谷坂堤、長法寺堤、桧谷堤等を築き、都井に御崎牧を設ける。室松浦壱岐守棟の女。

⑤種殷　碑銘　高鍋藩知事秋月公霊

（10代）　明治七年三月一八日卒（享年五八）

略歴　種任長男　黒帽子　松之助　栄之助　佐渡守　長門守　朝散大夫　文化一四年六月九日生、天保一四年八月二一日家督。明倫堂大改革、医学館等新設、寄宿寮切偲楼建設、郷学校開設、海防強化兵制改革。戊辰の役戦功により八千石下賜。室チカ米沢藩上杉斉定女。後室秀筑前秋月城主黒田長元女。

⑥種弘　碑銘　瑞応院殿前長州太守慧山宗定大居士

（5代）　宝暦三年七月二一日卒（享年六七）

（五輪）

略歴　種政長男　黒帽子　兵部　河内守　山城守　長門守
貞享四年一一月一六日生　宝永七年閏八月二日家督。
学問武芸を奨励し城中角の屋敷に稽古所を置く。
室中川因幡守久通女。

⑦種樹　碑銘
（11代）
従二位勲二等秋月種樹墓
明治三七年一〇月一七日薨（享年七二）
略歴　種任三男母岸田氏　政太郎　右京亮
天保四年一〇月一七日生　明治七年三月家督。
学問所奉行　若年寄　将軍家茂侍読
明治維新後は参与　公議所議長　大学大監　明治天皇侍読　勅選議員　書家としても優る。室藤子烏丸光政二女。

⑧種春　碑銘
（2代）
大洋院殿前長州大守古巌宗帆大居士　（五輪）
万治二年一〇月一五日卒（享年五〇）
略歴　父種貞母種長女ヲチョウ　種孝　種隣
黒帽子　三郎　長門守
慶長一五年五月一一日生　同一九年家督。
上方下方騒動あり。
室佐久間大膳亮勝之女。

⑨種英　碑銘
（13代）
従二位勲二等　秋月種英之墓
昭和三六年一〇月二九日薨（享年八三）
法名　涼心院殿徹誉明徳種英大居士
略歴　種繁弟　子爵明治一三年三月九日生　同二三年一〇月二日家督。
室利武子牧野伸顕二女後室須磨子鍋島茂明妹。

⑩半之丞碑銘
法輪院別峰宗心居士　（五輪）
元禄一〇年八月三日没（享年六四）
略歴　種春二男　明暦元年江戸屋敷にて乱心放火、石河内に幽閉。同所にて没。

⑪種利　碑銘
知幻院浄山悠水居士　（五輪）
正徳二年一〇月八日没（享年四八）
略歴　種信四男　乱心にて川南市納に幽閉。

⑫種善　碑銘
秋月種善墓
明治二〇年一〇月二三日（早世）種樹第八子。

⑬破竹郎碑銘
秋月破竹郎之墓
明治二年七月二六日（早世）
種樹第六子。

⑭種邁　碑銘　秋月種邁之墓
大正一四年七月二二日（早世）種英長男

⑮藤子　碑銘　秋月藤子之墓
昭和六年五月四日卒（享年八三）
種樹室烏丸光政二女。

⑯利武子碑銘　秋月利武子之墓
種英室伯爵牧野伸顕二女、大正九年六月一四日没（享年二五）。

## (2)　安養寺跡の秋月墓地

秋月山安養寺　浄土宗。鎮西派京都花頂山智恩院末

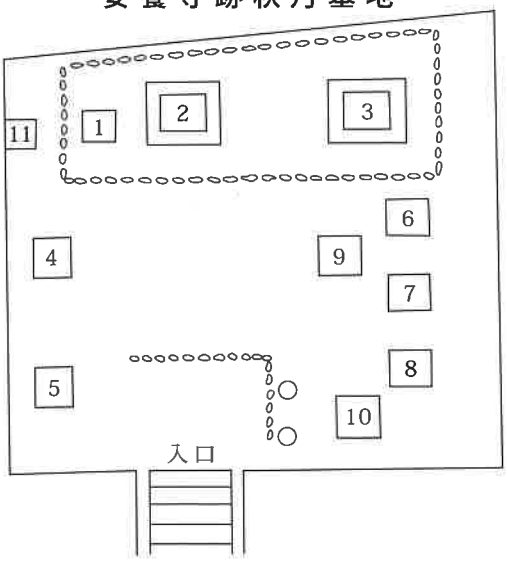
春実より一一代の秋月左衛門尉種頼の法名を「安養寺殿方誉直心大居士」と言い、その菩提寺として筑前国に乾元元年（一三〇二）建立。秋月氏移封により天正一五年（一五八七）福島今町に移し、更に慶長九年種長が高鍋に移るに当り高鍋に移し、その跡に常照寺を建立した。開山は明らかでないが中興開山は乗誉上人祭誉道無である。本尊は阿弥陀如来、寺領は初め七五石、後百石となったが、廃仏毀釈により廃寺となる。寺跡は秋月墓地に至る階段の東北である。階段右下に千手八太郎親子、大塚氏慎、観瀾の墓などがある。

①左近　碑銘　智岳院殿千林秀香童子霊位
正徳四年七月三日没
略歴　五代種弘長男　母京都柴垣是本女。
種美の兄。

②ヲチョウ　碑銘　見性院殿宝誉寿清大姉
寛永三年三月一五日没（享年四一）
略歴　種長二女　種貞室
種春母、江戸にて没、西久保大養寺に葬り後崇巌寺に改葬。

③種貞　碑銘　源室種貞大禅定門

安養寺跡秋月墓地



寛永五年八月七日没（享年四〇）

略歴　父は豊前馬ヶ岳領主長野三郎左衛門鑑良母は種長妹。旧名采女。種長二女ヲチョウ聟養子。上方下方騒動起り大阪に住む。大阪にて卒し大阪寺村浄国寺に葬る。法名西岳宗雲大禅定門。種春、両親の菩提のため江戸に見性山崇巌寺を建立し法名を崇巌寺殿源室種貞大禅定門と改め改葬。

④理子（あや）

碑銘　楽照院殿良誉妙道大姉
慶応三年七月十八日没（享年八〇）

略歴　種徳八女　ヲヨシ、後アヤ、板倉伊予守勝尚と婚姻、離別。江州山上領主稲垣藤五郎定成と婚姻、後離別。

⑤松子

碑銘　秋月松子之墓
明治二五年一月二〇日没（享年四四）

略歴　種任八女　村越豊之助室

⑥感子

碑銘　秋月感子之墓
明暦元年九月一二日（早世）

略歴　種春三女　法名勝専院華岳林貞大姉

⑦好子

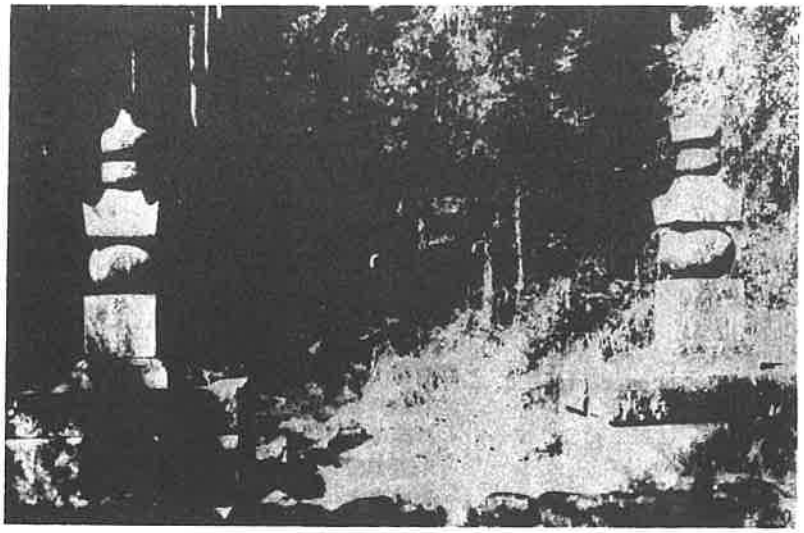
碑銘　秋月氏好子之墓
延宝四年七月六日（早世）（享年二）

略歴　種信八女生母山名サワ
法名　法玉院蓮香祖林童女

⑧好子

碑銘　秋月好子之墓
天和二年六月九日（早世）（享年四）

略歴　種信九女生母山名サワ
法名　相玉院生蓮貞祖童女



安養寺跡の秋月墓地

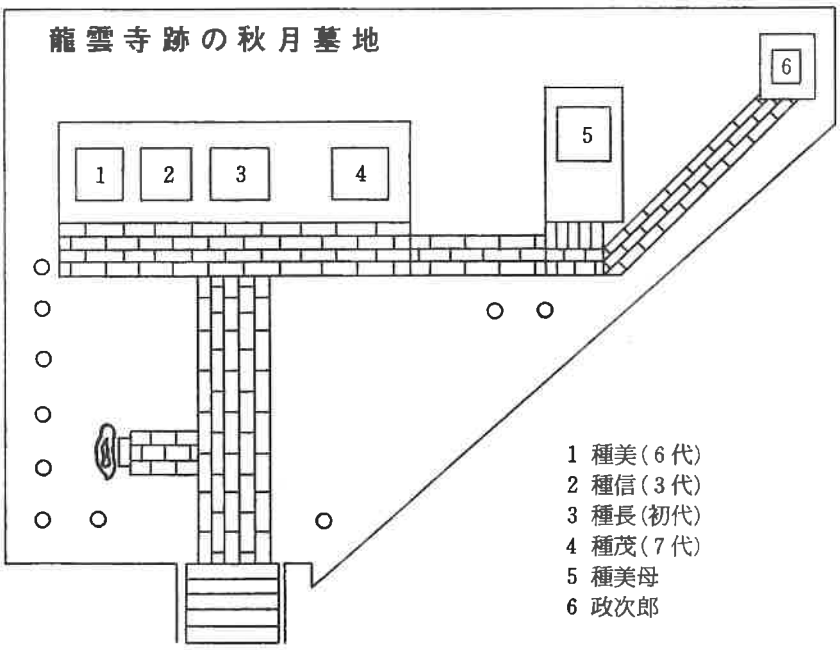
⑨左門　碑銘　秋月左門之墓　（種政四男）
宝永三年一二月二七日（早世当歳）

⑩クニ　碑銘　涼泉院殿永誉寿澗大姉
享保一四年九月二九日没（享年七〇）
略歴　種信六女　病気により元禄一五年閏八月四日高鍋シゲハザマ籠居。後改名ヲシケ。

⑪湛玄　碑銘　当山二十七世　湛玄和尚
享保一四年一〇月二三日寂
略歴　種利（種信四男）の長男。万次郎　一一歳より盛誉上人（種春三男）により落飾。増上寺に修学、享保一一年一〇月二二日安養寺住職。
法名　松蓮社栄誉上人良風湛玄和尚。

### (3) 龍雲寺跡の秋月墓地

瑞松山龍雲寺。禅宗　臨斉宗、京花園正法妙心寺派。初代藩主種長が慶長年中建立した。種長の法名を龍雲寺殿雄山俊英大居士という。すなわち種長が生前自分の菩提寺を建立して置いたのである。開山は高源照屋大和尚である。本尊は釈迦文仏で三代種信が寛文二年（一六六二）一二月建立し鐘楼も同時に建立したという。寺領百石、境内は七反一二歩。歴代住職は一七世まで明らかである。廃仏毀釈により廃寺。



①種美（みつ）　碑銘　龍光院殿前長州太守英巌宗俊大居士

（6代）　天明七年九月二五日卒（享年七〇）

略歴　種弘二男　母柴垣是本女　佐渡守　長門守　朝散大夫

享保三年五月一五日生　享保一九年一二月七日家督　宝暦一〇年七月七日隠居

倹約令を出し財政の充実に努め、英才を江戸京都に遊学させ発展の基礎に培った。室はる筑前秋月領主黒田甲斐守氏定女。

②種信　碑銘　天沢院殿前佐州太守竜嶽宗雲大居士

（3代）　元禄一二年七月二七日卒（享年六九）

略歴　種春長男　黒帽子　兵部　主殿　佐渡守

寛永八年一二月一四日生　万治二年一二月二八日家督　元禄二年二月晦日隠居

御屋敷に隠居所を造り住む。

上方下方騒動後の藩政を建て直し人材を登用し信賞必罰、福島統治を改革し、延宝元年（一六七三）城を改築し、財部を改めて高鍋と称し高鍋藩の基礎を作った。隠居に当り三男種封（くに）に木脇三千石を分知した。爾来高鍋藩は二万七千石となる。室松浦壱岐守隆信（平戸）女（めい）。

③種長　碑銘　石塔が風化し碑銘は見られない。法名は龍雲寺殿雄山俊英大居士。（法筐印塔（ほっきょういんとう））

（初代）　慶長一九年六月一三日卒（享年四八）

略歴　種実長男　三郎　長門守

永禄一〇年生　天正七年一一月鷲嶽（わしがたけ）城攻めに年一三にて初陣、戦乱の中に成長し天正一三年家督、同一五年七月三日日向国新納（にいろ）等三万石の朱印状を受け財部（高鍋）へ移封。関ヶ原の戦に東軍につき、朝鮮の役に従う。

室彦山舜宥法印（ゆうほういんしゅん）女。

④種茂　碑銘　清観院殿前佐州大守真乗宗円大居士

（7代）　文政二年一一月六日卒（享年七七）

略歴　種美二男　黒帽子　兵部　天明元年種穎と改名　寛政三年また種茂と改名　山城守　佐渡守　右京亮（うきょうのすけ）

寛保三年一一月晦日生　宝暦一〇年七月八日家督　天明八年一一月七日隠居

倫約令を実施し、大土木事業を起し農地を拡大し財政を充実した。また明倫堂を創設しすぐれた厚生福祉を行い、高鍋藩の全盛期を現出した。

室ミツ前橋城主松平大和守明矩女

⑤種美生母　碑銘　大心院殿寂而常光大姉（五輪）

宝暦二年一〇月一〇日没

略歴　種弘の側室　柴垣是本女

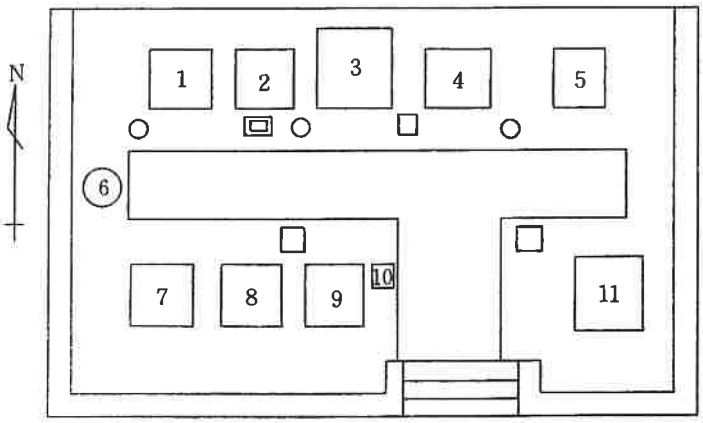
⑥政次郎　碑銘　智宝院殿玲巌守珪童子

宝暦六年三月一八日早世（生後三一日）

略歴　種美七男　妾腹

龍雲寺跡の秋月墓地

三好善太夫一族の墓




1 重道室　2 重道（4代）　3 重教（5代）　4 無銘　5 重教室　6 無銘　7 靭負（7代）　8 重賢室　9 重賢（6代）　10 童子　11 重光

## (4) 三好善太夫一族の墓

龍雲寺墓地の北の一隅に、米沢藩上杉家を継いだ鷹山公に「訓言」を奉った三好善太夫とその一族の墓がある。

**三好家系譜**　○印番号は墓図中の番号

初代　門田兵左衛門　名は正国、安芸国広島三好郷の人。

二代　花井数馬（初代三好善太夫）三代種信の時召抱。名を門田左近と替え、更に内記、治部右衛門と改め、後、三好善太夫と称す。寛文元年三〇〇石。同七年家老七五〇石。貞享三年牢人、元禄二年用人。同八年病死（人絵帳、本藩実録巻四、巻五）

三代　三好市弥（2代善太夫）通称平左衛門、元禄一三年善太夫襲名。者頭、大目付。享保一一年没。享年五七。

四代②三好藤馬（3代善太夫）諱は重道。元文二年用人。宝暦五年家老。同九年松三郎君、米沢藩上杉重定の聟養子に決る。一二月松三郎君に一書を献じ、更に一〇年奉贐書を献じた。松三郎君、後の鷹山は生涯これを机辺より離さなかったという。善太夫は宝暦一〇年一一月二日江戸に没した。享年五七。法名は本立院仁岳道生居士。①室は泥谷要人の女。明和三年没。法名は洞源院仙室寿貞大姉。享年五一。

五代③三好郡太左衛門重教。守衛、郡太夫。明和三年家老（三三歳）文化三年隠居。没年未詳（文化一二年か）法名、本源院仁海了義居士。⑤室法名、真如院潭海寿玉大姉　寛政元年没　享年四七。

六代⑨三好岩記重賢　文政一二年奉行、法名、本体院古巌道松居士　天保一三年没（享年四九）室滝沢氏慶応三年没　享年七五⑧法名如鏡院円台妙照大姉。

七代⑦三好靭負重秤　水築彦太郎長周三男虎三郎　秋月種節の弟　者頭　嘉永四年八月二日没。享年二八。法名　本性軒蘭精自番居士。

八代　三好退蔵　田村極人質勝三男、田村義勝の弟、充太郎重毅、検事総長　大審院長　津田三造事件審理、明治四一年八月二〇日没。享年六四。

九代　三好重彦。

⑩碑銘　早世知琳童子　明和九年七月一四日没。

⑪碑銘　国智院蓮心妙生大姉　配三好氏祔　天保四年一〇月二九日没。

歎喜軒賢巌隆哲居士　三好勇之進重光遺髪墓　文化元年三月十三日没。

## 11　土持墓地

土持氏の墓は大字南高鍋の太平寺墓地にある。太平寺集落の入口のバス停留所から牛牧に至る台地に上る坂道の右斜面に太平寺跡とその墓地がある。

養国山皇徳太平寺というのが寺名で、高鍋最古の寺院である。養老元年（七一七）建立といわれるが開山者宗派は不明。延暦年間（七八二～八〇五）以後天台宗となり、寛元二年（一二四四）ごろ曹洞宗となった。中興開山者は無外円照大和尚。田部四代参河守土持親綱が寺領を寄進している。明治三年神仏分離令により住職は複飾を命ぜられたが同年病死したため廃寺となった。

土持氏の墓は大正一五年二月、郷土史家岩村真鉄翁が発見し、私費を投じて人夫を雇い、散在していた墓石を一所に集めて、土持氏累世の墓と称した。墓石は三一基あり、昭和四七年四月高鍋町文化財に指定された。

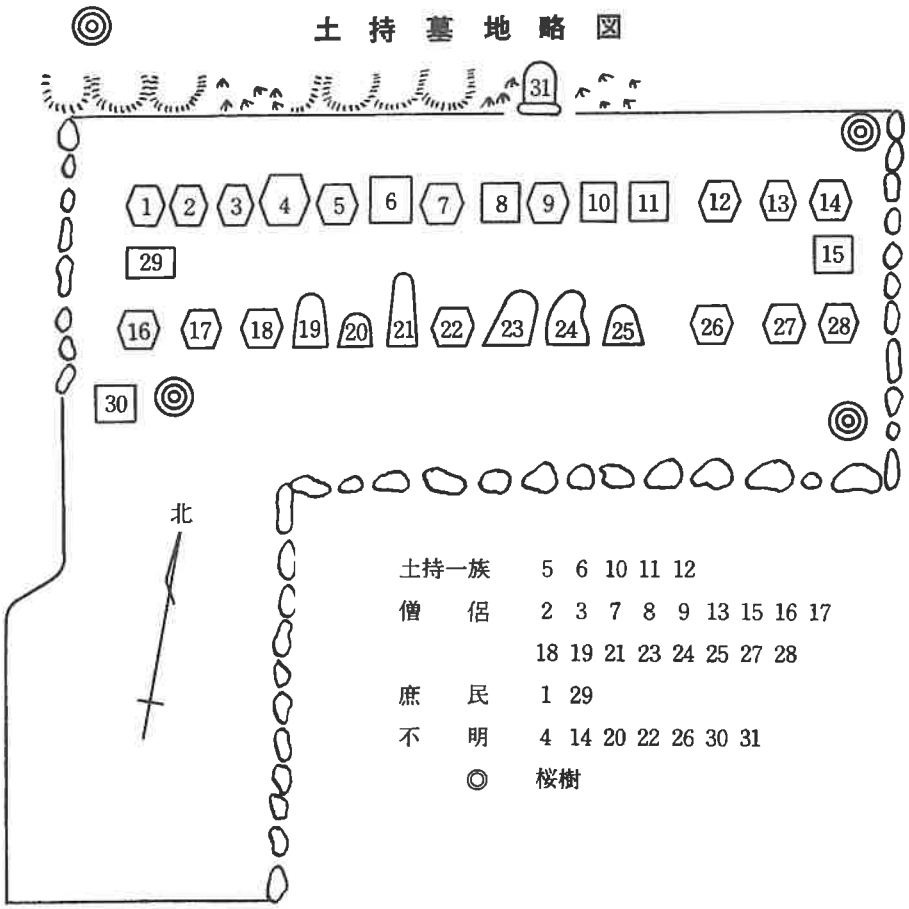
墓石の内、僧侶のものと思われるものが多いが、明らかに土持一族のものと認められるものが二基、それと推定せられるものが三基ある。岩村翁の手記には、永い歳月の間に山崩等もあり埋没していたと記されているところから見ると、更に多くの土持一族の墓があったと見てもよいであろう。

**墓碑**

5号（碑銘）性海金公庵主　（財部土持兼綱の墓）

系図によると財部参河守兼綱の法号で嘉吉二壬戌（一

**土持墓地略図**




| | |
|---|---|
| 土持一族 | 5 6 10 11 12 |
| 僧侶 | 2 3 7 8 9 13 15 16 17 18 19 21 23 24 25 27 28 |
| 庶民 | 1 29 |
| 不明 | 4 14 20 22 26 30 31 |
| ◎ | 桜樹 |

四四二）三月十二日歿。足利義勝将軍の時である。

6号（碑銘）梁山棟公大禅定門（財部土持高綱の墓）

系図によると、兼綱の子財部左衛門尉高綱の法号である。財部大明神縁起の系図によると六代目没落寅年と記載されているが年代が明らかでない。日向纂記巻四には、土持左衛門尉景綱が長禄元年（一四五七）丁丑七月一九日に伊東祐堯との戦に敗死したことが記されている。寺社帖の系図には景綱という人物はない。高綱の誤であろうか。

10号（碑銘）窓山仁公大姉（土持一族の女性の墓）

11号（碑銘）大透徹公禅定門（土持一族か）

13号（碑銘）正面に墨で字が書かれているが判読できない。笠石の四隅に突起があるから宝筐印塔である。10 11号も碑形は同じである。

外に

1号（碑銘）（正面）水　月窓守桂（刻字）（法名）

（右側）香月弥次兵衛（墨字）（俗名）

（左側）於高麗戦死也（墨字）

本藩実録巻二附録第三項に「全ラ道之内モクソ判官カ城攻ノ時…香月弥次兵衛守部左衛門次郎両人戦死」とある人物である。初代種長は慶長三年（一五九八）朝鮮征伐から帰朝しているからそのころの墨字が残っているのである。町文化財指定の際は明らかであったが今は「於高麗」の文字だけ見える。

8号（碑銘）徳巌（太平寺住職十四世徳巌交澤）

17号（碑銘）佛圓寶光（十六世住職）

29号（碑銘）早世源住槐花童子　明暦元年八月二十七日（一六五五）童児の墓である。

土持氏について

土持氏は文徳天皇の斎衡年間（八五四～八五七）土持秀綱以来六〇〇余年財部（高鍋）に居城したが、高綱の時長禄元年（一四五七）伊東祐堯に滅ぼされた。

土持氏の系譜で高鍋にあるのは、㈠太平寺過去帳記載のものと㈡財部大明神縁起と二種であるがいずれも簡単で記載人物も一致せず、年代も先後し問題が多い。

**㈠太平寺過去帳記載の系譜**

無復山蔵公庵主―親綱（参河守田部四代寺領寄附）―貞綱―兼綱（嘉吉二壬戌年三月十一日卒）―高綱（是ハ兼綱之養子元ハ甥也）―惟綱（是ハ高綱ノ弟也）以上六代（此代土持家没落）

**㈡財部大明神縁起**

土持玄蕃允田部直綱（法名覆山蔵公応安五年財部城主財部大明神崇敬）―親綱（財部太郎三河守金陽朝公）―朝綱（財部甲斐守長朝栄公）―興綱（財部太郎権守大宗綱公菖蒲池天神宮勧請延徳三年辛亥（一四九一）十一月二十八日）―兼綱（財部三河守　性海金公　嘉吉二壬戌年三月十二日）―高綱（財部左衛門尉梁山棟公　六代目没落寅年）―惟綱（太郎花翁栄公（一四四六）文安三丙寅年五月二十四日）―武綱

## 土持墓地発見について

大正一五年二月二四日、高鍋町道具小路に住む郷土史家岩村真鉄翁の家に二人の人が訪れた。東京四谷南寺町法恩寺の禅僧秋山乾英とその叔母木村弘子という老婦人であった。老婦人の話によると、その祖先は日向財部の城主財部家で、祖先は戦死落城の後、その室は三子を伴い筑前に逃れ、姓名を変えて二児は農となり、一児は黒田家に仕えて士となり明治維新に至った。それは系図の示すところである。その後一家は東京に移り住んだが、父は在世中、晩酌を傾くるごとに、一度は先祖の墓を拝みたいものと繰り返えしたが、遂に果さず亡くなってしまった。それで何とか亡父の志を継ぎたいと、今回訪ねて当地へ来た。昨日は土持弾正とその従者の墓といわれる木城村高城字岩戸にある一つの五輪塔と小さな野石の墓を拝したが、一字も刻まれず、祖先の墓がただ一つとは思われない。財部氏の墓を知っていられるなら教えてほしいということであった。真鉄翁もかって財部土持の墓というものは聞いたことがない。若しあるならば古き寺であろう。太平寺は古き寺で日本の三平寺の一つといわれ、そこの僧で唐にも渡った人もあるとはかって聞いたことがある。共にそこを探してみようと、翌二五日太平寺墓地を訪れてみると、荒れた籔の中に古い塔墓の倒れたのがあり、常人の墓とは思われない見なれない形であった。掘り起して携えた寺社帖の法号と対照したが符合しない。更に掘り出していくうち、樹の根の下から掘り出した墓石に、金粉さん然と「梁山棟公大禅定門」と刻まれた法号が輝くのを見た。それこそ寺社帖にある財部左衛門尉高綱の法号であった。二人は驚喜して読経礼拝し、土を鄭重に紙に包み、これをふところにし再来を約して帰途についた。その後翁は人を雇うて更に墓石を掘り起し、同じところに集めて二列に並べ、四隅に桜樹を植えて祭ったのである。

今はその桜は樹令五〇余年、一株が数枝に分れ、春ごとに美しい花を咲かせている。

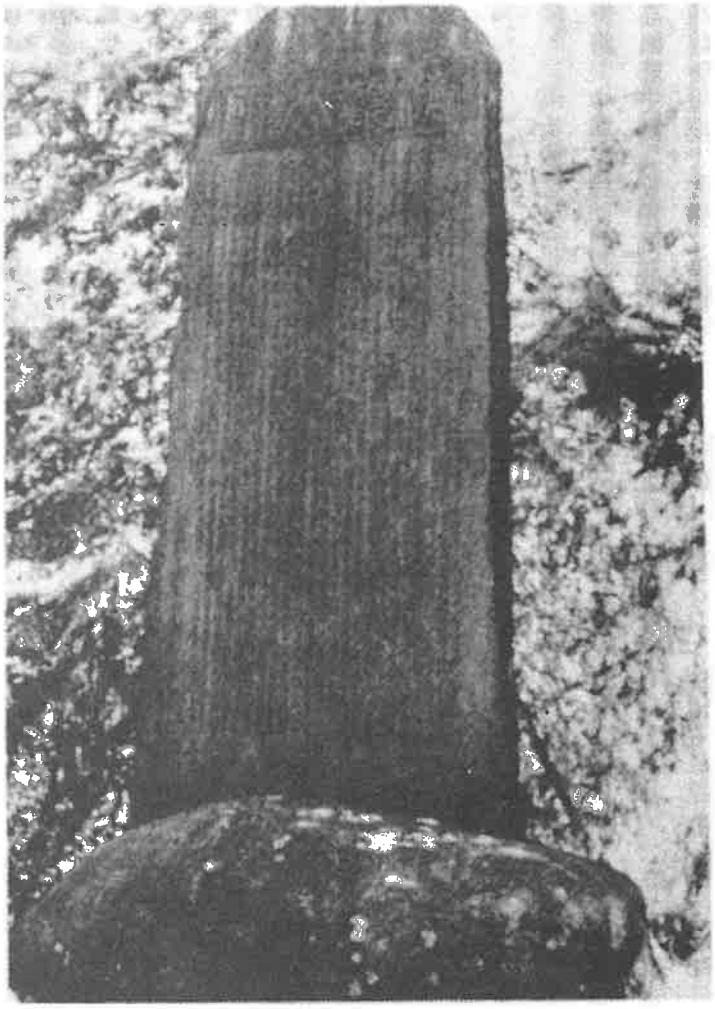
## むすび

はじめに述べたように、町内の主要な史跡について概略を述べたのであるが、場所により精疎必ずしも整っていない。秋月墓地の後に「三好善太夫一族の墓」をつけ加えたのは近ごろ、とみにこれをたずねる人が多いし高鍋史の上でも重要な人物であるからである。

記述の内容については正確を期し、できるだけ多くの史料を参照した。多くの先人の調査研究に負うところが極めて多いが、それらを引用することは避け必ず原史料について検討して記述したつもりである。次に使用した史料を記し、諸先輩に敬意を表すると共に、後人の検討の参考に資したい。

本藩実録（正、拾遺、続、続々）　大蔵姓秋月氏末葉記録（秋月家蔵）寛政重修家譜　中興系図（岩村真鉄）貞享寺社帳　天保寺社帳　高鍋藩史話（安田尚義）秋月種茂と秋月種樹（同上）高鍋養蚕業と養蚕に貢献した人々（大泉篤範）高鍋の史跡（同上）秋月藩の宗教政策と高月周辺の寺々（同上）晩翠学舎記（武藤麒一）刀鍛治の生活（福永酔剣）日向の刀工とつば（同上）筑紫日記（高山彦九郎）土持財部家史実調査記録（岩村真鉄）

# 碑



清 観 公 石 碑

## (1) 明倫堂記碑

この石碑は、高鍋高等学校内、正門西側に建てられ、見上げるほどの長大なもので、がっしりした台座の上に置かれている。碑文は漢文であるが、その内容を国語訳にすると次の通りである。

古の徳高き王が、国家を建設し、人民に君主として臨むに当っては、学問教育を最も重要視した。故に堯や舜は教育、並びに音楽（重要な教育課目である。）をつかさどる官を置いた。夏、殷、周の三代には、小学、大学の制度を設けた。そして、教育の方法は、日常の人としての道を教えるに、ほかならなかった。つまり、親によく仕え、長上の人に対しては従順であり、社会的には誠実で、信義を重んずるということである。

この故に、舜帝は契（人名、舜の文部大臣）にむかって、「多くの人民は相親しまないし、人道に従わない。故に汝は教育をつかさどる大臣となって、つつしんで五教（儒学で人の守るべき五つの教）の意を言いきかせよ。教育するに当っては、せっかちでなく、弾力性をもって接し、寛大であれ。」と命じた。また孟子は次のように言っている。「古代には庠序と名づける学校の設備を置き、人民の教育をしたが、これは皆、人としての道を明らかにするためである。」と。そもそも、先人の高徳の君主は、風俗の乱れを正し、すぐれた賢人を役人とすることが、政治の基本であるとした。

風俗を正し、優れた人物を養成する要点は、学問を重んじ、学びの師を尊崇するという師学の道を確立することにある。思うに、師学の道が確立し、教育がよく行われると、人格見識の高い有能な人が、指導的立場に立つことになり、人の道は上に明らかに、人民は互に親しみあうようになるのである。これが、先人の高徳の君主が、極めてよく国家を治め得た理由なのである。長門守種弘公は、稽古所を城中に創設して、学問武芸を奨励した。父種美公が藩主の位を継ぐに及んで、祖父種弘公の志を継ぎ、その事業を発展させ、更に優れた人材を教授に選んで子弟を導き、金銭や穀物を支給して、費用に備え、時には、みずから学問武芸の勤惰の状況を観察し、よい者は励まし、よろしくない者には注意を与えた。また、日向の地が片田舎であって、学術にあやまりのあることを恐れ、志のある青年を都に遊学させ、正しい学問を学ばせた。そこで、教化は次第にゆきわたり、風俗は純正に向った。父種美公が老いて、藩の事業を予に伝えられてから、約二

十年になる。また父君の立派な意向を承けつぎ、藩中の人民に、孝弟仁義の道を教えてきた。しかし、予は父に似ず、才が乏しく、人民の模範になることの出来るものがない。そこで、教化は年ごとにゆるみ、風俗は歳ごとに衰えて、父君の善政はまさに荒廃しようとし、予は心に深く恥じ恐れている。ところが、近頃、賢友千手廉斎が予に向って「学芸稽古所を改築し、その規模を広め、小学と大学とをわけて、その勉学の状況を観察して下さい。これもまた、衰えたものを盛り返し、すたれたものを補うために、先ず為さねばならないことなのです。」と告げた。予は、そこで、古の聖賢の法にしたがい、父君の志を受け継ぎ、新しく学堂を城中に経営し、小学と大学とを分け、年令に応じ、成長の度合に従って、学習させることにした。更に、米三十五石余を一年間の費用として、支給することにした。このことは、人民に苦労をかけ、資材を無駄づかいして、見せかけをよくするためではない。祖先からの事業を受け継ぎ、藩を安泰に保つ道の要点が、この子弟教育にあるが故である。諸士の子弟で、ここに学問武芸を学ぶ者たちは、予のこの気持をつつしみうけて、朝夕、孜孜(つとめて)として勉強せよ。そして、その学問の方法は、周敦頤、程顥、程頤、張載、朱熹の説によって孔子、曽子、子思、孟子の道を求めるべきである。学問というものは、自我の完成のためであって、人のためにするのではなく、「大学」にいうところの知識をきわめつくすことから、物事の最善に止るところに至り、志向を誠実にすることから、天下を治めることに至り、環境の清掃や、人との応待という手近なことから、道理天性をきわめることに至るというように、順序を追って次第に進み、段階を飛び越したり、節度をしのいだりしてはならない。また、意志弱く、中途半端でやめてはならない。高遠すぎることを求めてはいけない。あまりに卑近なことばかりにとらわれてもいけない。以上のような学び方が、正当の学問というもので、孔子や朱子の学における決まった学習法である。そもそも、国を治める根本は朝廷にある。朝廷の主体は君主にある。君心の心構え、身構えが正しければ、天下国家が正しくないということはない。しかし、君主の補佐役に卓越した人物が居なければ、君主の正しさを行い、風俗をよくすることはできない。百官に立派な人物を得なければ、政治を正すことも、物事を確立することもできず、国家安泰の功を挙げることはできない。この故に、政治の道は、すぐれた人物を得ることが根本なのである。そして、学校

は、その人材を養成するところなのである。国家安泰の要には、これより重大なものはない。ひとたび、すぐれた人材ができあがり、才知、徳行の高い者が適当な地位につき、有能な者がその職につき、上に向っては君主のあやまりを正し、君主は人民を愛し、君臣それぞれ、その道を尽したならば、国中の人は、目に善を見、心に感動して奮起し、日一日と善に移り、「扉を閉ざさなくても、盗賊のおそれがなく、道に物が落ちていても、人の物は拾わない。」という、かの唐虞三代の治のようになるであろう。ああ、この堂に学ぶ者はつつしみ勉めよ。怠ってはならない。乱れてはならない。安永七年二月二十四日、学堂の落成した日、名づけて「明倫堂」という。大蔵種茂（秋月種茂公のこと）謹しんでしるす。

この石碑の背面に漢文で、旧制高鍋中学校長であった泥谷良次郎の碑の建立に至った次第が記してある。安永七年、時の藩主秋月種茂公が明倫堂を開かれてから百五十年間、郷土文化の上に、人材輩出の上にその明倫堂の影響、及び余沢が大いにあった。然し、廃藩以後は、文物が変り、諸学校に藩学の精神を継承する意がうとく、郷土の人々の遺憾とする所であった。その故に、国家徳教の本源たる明倫堂の精神を顕揚し、後世を諭す意味から、篆額を秋月左郁夫が書き、在東京郷友会員ほか有志などの寄附により、昭和四年十一月、郷土に設けられた旧制高鍋中学校（現高鍋高校）の校庭に建てられたのである。

## (2) 清観公碑

この碑は、同様に高鍋高校内の明倫堂記碑と並んで建てられている。明倫堂は、それを開かれた名君清観公、即ち種茂公と離して考えられぬもので、同じ場所に建てられたことは、誠にその精神にふさわしく、意義深いものがある。次に碑に書かれた漢文を読み下してみよう。

秋月氏、武功ヲ以テ西海ニ著ハルルコト尚シ。本光公（春実）ノ藤原純友ヲ討チ、浄巌（種材）無外（種家）二公ノ女眞、蒙古ヲ撃攘セルハ、其ノ最モ赫々タル者ナリ。万歳公（種成）ノ養和帝（安徳天皇）ヲ奉ジ、普明公（種貞）ノ足利尊氏ヲ討チ、挙族勤王、成敗ヲ度外ニオキ、志遂ゲズトイヘドモ、誠忠義烈万世ニ伝フベキナリ。西林（種美）、龍雲（種長）二公、豊筑ノ兵ヲ率キ豊臣氏ト戦ヒ、利アラズ、封ヲ日向ニ移サレ高鍋城ニ居ル。世々仁政ヲ施シ、百姓悦服ス。清観公出ヅルニ及ビ文化始メテ隆ンナリ。公諱ハ種茂、故有リテ種穎ト改メ後旧ニ復ス。龍雲公（種長）七世

ノ孫ナリ。祖、諱ハ種弘、瑞応公ト称ス。始メテ稽古所ヲ設ケ、藩士ニ命ジ日ヲ更メテ文ヲ学ビ武ヲ講ゼシム。考、諱ハ種美、龍光公ト称ス。母ハ黒田氏、諱ハ光子、筑前秋月藩主諱ハ長貞ノ女ナリ。公、寛保三年（一七四三）十一月晦日、江戸麻布藩邸ニ生ル。幼ニシテ黒帽子ト称シ、長ズルニ及ビ兵部ト改ム。紀平洲ヨリ業ヲ受ク。宝暦七年（一七五七）山城守ニ任ジ従五位下ニ叙セラル。十月七月、龍光公老イ、公封ヲツグ。時ニ年十八。聡明ニシテ学ヲ好ミ、寛仁ニシテ大度アリ。明季始メテ封ニ就キ、文武ヲ奨励シ、考貞ヲ旌表シ、貧民ニシテ多産ナル者子ヲ育テザル者有ルヲ聞キ、三子ヲ生メバソノ一子ヲ禄シ、四子ヲ生メバ二子ヲ禄シ以上ハ之ニ準ジ、十歳ニ至リテ止ム。一家病ニカカル者多ケレバ則チ穀ト薬トヲ賜フ。薬価貴キ者ハ預メコレヲ官庫ニ貯ヘ以テ緩急ノ用ニ供ス。失火延焼スレバ則チ穀ト竹木トヲ賜フニ差有リ。薩州ニ良馬多シト聞キ、使ヲ遣シテ牝馬七匹ヲ購ハシメ、以テ改良ヲ図ル。堤防ヲ築キ溝渠ヲ設ケ荒蕪ヲ拓キ樹芸ニ務ム。深ク奢侈ヲ戒メ、賭博ヲ厳禁シ、若シ犯ス者アレバ、ソノ両隣ト前三戸連座ス。公自ラ給スルコト極メテ倹ナリ。然レドモ常ニ衆ト楽シミヲ同ジクセンコトヲ思フ。城ヲ距ル東里バカリニシテ離亭アリ。時ニ臨ミテ楽ヲ奏ス。士民男女皆縦覧ス。一日舟ニ乗リ、将ニ離亭ニ至ラントス。堤ノ漏水ヲ見テ曰ク、措キテ修メザレバ田将ニ涸レントスト。直チニ命ジテ之ヲ塞ガシム。ソノ心ヲ用フルノ密ナルコトカクノ如シ。公、諸有司ノ学問ノ余暇無キヲ察シ、毎月二回儒臣ヲシテ経ヲ藩庁ニ講ゼシメ、必ズ壇ヲ降リテ相対シ、諸有司皆侍ス。以テ師ヲ崇ブコトヲ示ス。シバシバ七十以上ノ者数百千人ヲ召シ、庭上ニ席ヲ設ケ、親シク臨ミテ宴ヲ賜ヒ、ソノ子女ヲシテ之ヲ扶ケシメ、マタ宴ヲ与ニシテ以テ老ヲ敬フコトヲ示ス。百歳ニ及ブ者アレバ各俸ヲ賜フ。嘗ッテ鷹ヲ郊外ニ放ツ。耕ヤス者ヤメズ、田畔ニ行厨（弁当）有ルヲ見テ侍者ニ命ジ試ニ之ヲヒラカシムレバ、盛ル所皆草蔬ニシテ一穀粒無シ。公熟視シ、涕ヲ流シテ曰ク、農夫之ヲ食シ終日役々タリ。誠ニアハレムベキナリト。先ヅ自ラ之ヲナメ、侍臣ヲシテソノ余ヲ食ハシメ、耕ス者ヲ召シテ曰ク、予等汝ノ食ヲ食ヒ汝等ヲシテ食無カラシムト。コトゴトク携フル所ノ酒食ヲ分チ与フ。感泣セザルナシ。一年大イニ旱ス。神官僧侶ニ命ジテ雨ヲ祈ラシムルモ験無シ。城ヲ距テテ二里比木ノ祠アリ。大国主命ヲ祀ル。公将ニ徒跣（すあし）ニテ往キテ祈ラントス。群臣大イニ驚キ、ソノ病ヲ致サンコトヲ恐レ切ニ之ヲ諫ム。ワヅ

カニ草履ヲ著クルコトヲ許シテサン笠（ばっちょう笠）ヲ用ヰズ。スデニ祈リテ還リ、未ダ城ニ及バザルニ沛然トシテ雨ソソギ、沢隣藩ニ及ブ。世以テ至誠ニ感ズル所ト為ス。京都ノ人宇井黙斎ハ経義ニ精通ス。藩士往々従ヒテ教ヲ受ク。安永三年（一七七四）、公伏見ヲ過ギ往キテ之ヲ訪ハントシ、先ヅ使ヲ遣シ志ヲ陳ベ、贈ルニ鮮魚ヲ以テシ、藩士ノ為ニ恩ヲ謝ス。黙斎感激シ直チニ公ノ旅館ニ至ル。公盛服シテ出デ迎ヘ之ヲ饗スルコト甚ダ厚ク、歓ヲ極メテ罷ム。後、伏見ヲ過ルゴトニ必ズ相見ル。公又幕府ノ士桑田善太郎ノ名ヲ聞キ、往イテ見ント欲シ、使ヲ遣シテ期ヲ請フ。辞スルニ老病ヲ以テス。公、請フコト益々切ナリ。善太郎其ノ誠意ニ感ジ遂ニ来リ見ユ。公歓ビ迎ヘ、饗スルニ盛饌ヲ以テシテ教ヲ請フ。善太郎為メニ経ヲ講ジ諸士皆与ニ聞クヲ得タリ。後以テ常トナス。六年（一七七七）公、千手興欽ノ議ヲ用ヒ、新ニ学校ヲ築キ、明倫堂ト号シ、自ラ記ヲ撰シ、生徒ヲシテ向フ所ヲ知ラシム。時ニ親シク之ニ臨ミ、教官及ビ諸生ノ経ヲ講ズルヲ聴ク。経ヲ講ズル者ハ、庶人ノ子弟トイヘドモ公ト席ヲ同ジウス。道ヲ重ンズル所以ナリ。藩士ノ子弟、進ンデ見エンコトヲ請フ者アレバ、先ヅソノ文武ノ成績ヲ検シテ而シテ後之ヲ許否ス。又、自ラ郷閭（郷里）学規ヲ撰シテ之ヲ頒布シ、毎月里正（庄屋）ヲシテ各ソノ里人ヲ召集シ、読ミテ之ヲ聞カシム。ソノ文平易ニ倫理ヲ解釈ス。閭巷（町の中、村里）ノ児女モ皆大義ニ通ズルコトヲ得タリ。凡百ノ制度ハ多クハ公ノ定ムル所ナリ。公ノ弟、諱ハ治憲、鷹山ト号ス。上杉氏ヲ継ギ羽州米沢藩主ト為ル。米沢ノ治績ハ天下最ト称ス。鷹山公常ニ曰ク、吾レ学業ハ兄ニ若カズ。タダ兄ノ藩小ナリ。故ニ沢ヲ被ル者鮮シ。措シムベキナリト。江戸ノ人橘南谿、海内ヲ周遊シ、ソノ見聞スル所ヲ述ベ、東遊記、西遊記ヲ著ス。西遊記中ニ特ニ仁政篇ヲ設ケ、公ノ事蹟ヲ記スルコト頗ル詳カナリ。後世ノ史ヲ修ムル者、多ク之ニ拠ル。九年、公佐渡守ニ移ル。天明七年（一七八六）五月、将ニ江戸ヲ発セントス。タマタマ龍光公、面ニ瘡ヲ生ズ。公、性至孝、深ク之ヲ憂ヘ、病ヲ称シ留リテ奉養ス。鷹山公米沢ニ在リテ之ヲ聞キ、マタ至リテ相共ニ保護スルモ終ニ立タズ。ソノ喪ニ居ル昼夜霊牌ノ前ニ危座シ礼服ヲ脱セズ。明年公致仕シ、後改メテ右京亮ト称ス。文政二年（一八一九）十一月六日麻布藩邸ニ薨ズ。年七十七。光林寺ニ葬ル。公、河越侍従松平明矩ノ女ヲメトル。諱ハ光子、先ダツテ卒ス。泰雲（種徳）、俊徳（種仕）ニ公相継ギ励精治ヲ図リ旧章ニ遵由ス。故知事公、諱ハ種殷、恭倹民ヲ愛

シ、世形ヲ洞察シ、学制ヲ更張シ、寄宿寮ヲ新築シ、優等諸生ヲエラビテ之ニ入ラシム。文運益々隆ニシテ遂ニ校地ノ狭隘ヲ感ジ、隣地ヲ相シ学校ヲ改築ス。規模宏壮ニシテ旧観ヲ一新ス。又兵制ヲ拡張シ、諸郷ニ屯兵ヲ置キ、諸港ニ砲台ヲ築キ演習オコタラズ。文武ノ生徒、命ヲ奉ジテ遠遊スル者マタ多シ。故ニ維新ノ際、藩中一モ方向ヲ誤ル者無シ。兵ヲ発シ、北陸道総督ノ先鋒ト為リ連戦勝ヲ奏ス。歴世諸公勤王ノ遺風ナホ存スル有ルハ、実ニ公ガ文武ヲ奨励スルノ遺訓ニ由ルナリ。故知事公ノ諸公子皆先ダツテ卒ス。故二位公、諱ハ種樹、古香ト号ス。弟ヲ以テ家ヲ承ク。位尊ク徳高ク、濶達ニシテ士ヲ愛シ、学識深遠、文彩英発、廃藩ノ後猶ホ自ラ明倫堂ニ臨ミ、生徒ヲ教育スル者数年、マタ公ノ志ヲ継グナリ。今、衆相謀リテ碑ヲ建テ徳ヲ頌セント欲ス。誠実不敏ナルモマタ余沢ヲ被ル者、謹ンデソノ梗概ヲ記スルコト此ノ如シ。才疎ニシテ文拙ク、盛徳ノ万一ヲ表スルニ足ラズ。是レヲ遺憾ト為スノミ。明治戊申（四一年）四月、前明倫堂教授、日高誠実謹撰并書。（石川訳による）

さてこの碑の背面に、同じく泥谷良次郎校長の建立次第が記してある。郷土高鍋では文教中興の祖である清観公の顕彰碑を建てる希望があった。明治四十一年には、日高誠実先生がその顕彰文を書かれていたが、其後為すことなく月日がずるずるとたってしまった。そして高鍋中学校が新設されて初めて、念願の碑が、誠実先生の嗣子日高騏三郎を中心とした在大阪宮崎県人会有志が賛助、篆額（てんがく）を秋月種英公が書かれて、昭和四年六月、明倫堂記碑に先だって、同校庭に建てられたのである。

### (3) 島田小学校跡の碑

この碑は農業高校構内の明倫堂跡の碑から、北に歩いてすぐ路脇にある。

正面に

島田小学校跡

側面に

昭和二十九年十月三日建立

高鍋東小学校創立五十周年記念事業委員会

と記されている。島田小学校は、明倫堂の小学（行習斎）の後身で、明治に入って開校されている。

### (4) 高鍋小学校跡の碑

この碑は現在、町役場裏、税務署北入口の東側柵外の

すぐ脇にある。碑は島田小学校跡のものと同型で、

正面に

高鍋小学校跡

側面に

昭和二十九年十月三日建立

高鍋東小学校創立五十周年記念事業委員会

と記されている。高鍋小学校は、明治二十年、島田、上江小学校が合併して出来たもので、同二一年には高月に新校舎を建て、同二五年には高鍋上江組合立高鍋小学校と称した。同二六年、高鍋尋常高等小学校、同三七年に尋常科だけ分れて、高鍋、上江それぞれの地区に建てられた。

### (5) 美智子妃歌碑

持田台地の北端にある県農業大学校（前高等営農研修所）の構内、正面左手に歌碑が建てられている。斬新な意匠のもとにつくられた明るい感じの歌碑である。

皇太子妃御歌

耕転機若きが踏みて草原の

土はルピナスの花をまぜゆく

東宮大夫　鈴木菊男謹書

御歌を頌する碑が歌碑の脇に、次のように記されて建てられている。

この御歌は昭和三十七年五月三日皇太子同妃両殿下が當研修所に行啓のみぎり、青少年が黄花ルーピンの花咲き誇る畑で、耕耘実習をしている情景を御視察賜わったときの御印象を、本年宮中恒例の歌会始めにお詠みになったものでございます。御歌には農業近代化の方向と農業青少年の進むべき道について、温情溢れる激励の御心が拝せられ、誠に感激に堪えません。ここに宮内庁の御許しを得て、御歌碑を建立し、将来の農業繁栄のために青少年が希望と誇りにみちた日々をおくるよう祈念いたします。

昭和三十八年五月三日　宮崎県知事　黒木　博謹白

### (6) 種樹公漢詩碑

舞鶴公園内、神社と大楠との間にたつ大きな粘板岩の詩碑で、明治三八年六月、種樹公が亡くなられた相州片瀬の地に建てられたものである。公はその前年三七年十月十七日に七二才で亡くなられた。この詩はその年の作である。

碑は大正の初め高鍋に移された。

家枕湘江得景多　入窓駿嶺雪峨々タリ
相逢朝暮釣魚叟　不説世波観海波ヲ
七二翁　古香種樹題

公の暮された家は片瀬の川に沿い、窓からは聳えたつ雪の駿河の山が眺められ、公は朝夕釣をする老人に逢うなど、世事をはなれ、海を見て悠々自適の生活をされたのであろう。

碑陰文は友人の時の大蔵大臣曽祢荒助が書いている。即ち公の朝廷や維新の大業に奉仕した勲功を讃え、そのおおらかな世にもすぐれた人格を賞めている。そして公が年老いてからは、美しい自然の中で詩文を作ったり、書画をかいたりして楽しんでいられた事を書き、詩を長く残すため、諸友と資金を集め、石を買い、それに詩を刻んで、詩碑の建設に盡力している。そしてこの詩を読めば、その人柄が偲ばれるとしている。

### (7) 安田尚義歌碑

高鍋農業高校正門を入って、北側に高さ二メートルの自然石の歌碑がある。背面に作者の経歴及び除幕に至るまでの次第が記されている。山茶花会（短歌の会）が、昭和三四年五月三日、宮崎・鹿児島・高鍋の有志から寄附金を集めて、完成し除幕したものである。碑の正面に次のように記されている。

尾鈴山ひとつあるゆえ黒髪の
白くなるまで国恋ひにけり

安田尚義は、明治一七年四月に平原に生れ、後上京、早稲田大学を卒業後、函館商業の教員を経て、鹿児島一中に長年国史を講じた人で、歌誌「山茶花」を主宰し、多くの短歌愛好家の指導や、郷土史の編纂に力を注いだが、惜しくも昭和四九年一二月にこの地に没した。

この尾鈴山は、高鍋からわづかしか見えないが日向人の心の拠り所で、これを歌った文人の歌は少くない。有名な牧水の歌、「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきてをり」があるが、尚義もこの尾鈴山があるゆえに、晩年に至るまで、このふるさとの山を恋いつづけ、生きる力の支えとしたものであろう。

### (8) 芭蕉句碑

高鍋駅から北に歩いて鵜戸神社があるが、その境内に芭蕉の句碑がある。環境は樹木ごしに海が望まれ、たまに列車が傍を通るのみで極めて静かである。句碑は高さ九〇センチ、幅六七センチの自然石で、正面に芭蕉の句

が刻まれている。

うたがふな潮の花も浦の春

この句は元禄三年、芭蕉翁が二見が浦の絵を拝して詠めるもので、長い冬が続いたが、もう吹く風もあたたかく、うちよせる白波もおだやかで、まさしく海辺には、春の気がみちみちているという風景を歌ったものであろう。

一体にこのような芭蕉の句碑は、全国に千三百六十余基あるといわれ、信州木曽路の馬籠（まごめ）の入口にある新茶屋に建っているものが有名である。「送られつ送りつ果（はて）は木曽の秋」馬籠は島崎藤村のふるさとである。この鵜戸神社の句碑も、旧高鍋藩時代、句会が盛んであった頃、俳人たちの巨頭であった鵜戸神社神官岩切副寛が、慶応二年以前に建てたものとされている。

## (9) 石井十次詩碑

高鍋高校の創立五十周年を記念して、その事業のひとつに石井十次の詩碑がある。これは同高校の正門脇に、昭和四七年に建立されたが、椎葉産の青い自然石のなかに鋳銅板をはめこみ、明朝体の書体で、極めて雄渾な十次のうたった三連の詩が刻みこまれている。

帰国途上の所感

ア、美なるかな日向の地
　予は実に爾を愛す
ア、壮なるかな太平洋
　予は実に爾を愛す
南北四十里　東西二十里なる
　日向の原野よ
爾は予等イスラエルのために
　備えられたるカナンにあらずや
人間はその境遇によって
　教育せらるるものとせば
爾高鍋よ　爾は予が
　理想的人物を養成するに於て
最も適当のところなり
　ア、美なるかな尾鈴山
　ア、壮なるかな太平洋

この詩は明治二七年三月二九日の十次日記に、「帰国途上の所感」として書かれたものである。詩のなかのイスラエルは、現在のイスラエル（ユダヤ）であるが、カナンはその西部地域、地中海に沿えるイスラエルのめざす楽土である。基督者としての十次が、旧約聖書の地名を採ったのは自然であるが、イスラエル民族の理想郷カ

ナンにも比すべきこのふるさと高鍋こそ、教育の最もすぐれた所として彼はうたったのである。今でもその精神は脈々として現代人の心に波うっている。

## (10) 石井十次顕彰碑

高鍋駅の線路をへだてた土堤の上に、石井十次を顕彰する二つの碑がある。

一つは地元ライオンズ・クラブが建てたもので、角型の大きい正面に、横書の太文字で上段に

孤児の父

下段にややそれより小さ目に

石井十次顕彰の碑

と記されている。意匠の形といい、色の配合といい凝ったものである。建立は昭和四一年六月である。

もう一つは書店経営主鬼塚八郎が、開店十周年記念として建てたものである。一丈（約三メートル）あまりの高さの碑の正面に、

孤児の父石井十次先生誕生の地　高鍋

その背面に次のように記されている。

石井十次先生は一八六五年（慶応元年）四月一一日、当町馬場ノ原に生れ、キリスト教の信仰に基き、青年時代独力孤児院をはじめ、あらゆる困難に堪えて一時は孤児千二百人を収容せる世界的孤児院とした。中ごろ孤児教育は労働自治にありとして、茶臼原に移り、原野を開墾し、その理想を実現して世界的偉人と呼ばるるに至った。多年にわたる困苦心労のため一九一四年（大正三年）一月三日、五〇才で病死した。本年はその生誕百年に当り、碑を建てて顕彰する。一九六四年四月　鬼塚八郎、安田尚義識

二つのいずれの碑も郷土の偉人十次先生の人格と業績を永久に讃えるため、旅行者の目につく所に建てられている。

ここは蚊口浜の共同墓地の中にあり、浜の松風の音、波のひびきが伝わってくる場所である。

## (11) 石井十次誕生地碑

この碑は川田の館野邸の庭にある。高さ四尺六寸（一メートル四〇センチ）、幅二尺一寸五分（六五センチ）の大きさのもので、正面に記されている。

石井十次先生誕生之地

友人蘇峰菅正敬書

そして門の入口の脇に横書の説明板がある。

石井十次生誕の家

慶応元年四月一一日（西暦一八六五年）石井萬吉の長男として十次この家に生る。

明治一五年岡山医学校に入学するまでこの地に育つ。

十次はその性剛直果断仁慈の行に篤く、我が国近世救済事業の始祖として孤児救済に生涯をささげた偉人である。

明治一七年馬場の原教育会を起し、岡山に至り、孤児救済の生涯がはじまる。

天与の資質に加えて精神的素地はこの地にて培わる。

昭和四十五年　　石井十次顕彰会

## (12) 四哲碑

碑は筏の町立高鍋福祉館入口の右手にある。高さ約一メートル四二センチ、幅八二センチの碑である。碑文は次の通りである。

この処は高鍋藩の重臣秋月種節の旧邸なり。その四男悉く茲に生る。長は水筑弦太郎、秋月家の旧姓を冒す。気節あり。若冠維新の志士として江戸伝馬町の獄に死す。次は長平、黒水家を嗣ぎ、寛厚大人の風あり。郷土に在って殖産と風教の先導を念とす。大隠は市に隠るるの例か。三は左郁夫、フランス法学者、後外交官となり大使に進む。硬骨にして我外交界の長老たり。大東亜戦の非なるに及び、邦家の前途を深慮し、身を以て和平運動の先駆者となる。四は馬左也、鈴木家を嗣ぐ。初め内務官史、後、住友本店総理事となり、経営一新、常に国家的見地に立ち、士塊商才を説く。人格識見財界西の棟梁たり。

ああ四哲ここに喜戯し、長じて郷国の偉材となり、余薫永く尽くるなし。即ち碑を建て後進の奮起を促すと云。昭和三十一年六月、題額秋月種英公、宮崎県文化専門委員会議長、安田尚義撰並書。

## (13) 殉難招魂之碑

この碑は舞鶴公園の石段を西にあがって、次に北へ石段をあがろうとする曲り角の処に、亀の形をした台石の上に置かれている。かなり大きいもので、初め谷坂墓地にあったが、西南役後、ここに移された由である。碑文は初めて高鍋の地を踏まれた秋月種樹公の書かれたものである。内容を要約すると次の通りである。

長い間姦雄が地方に対立し、世論は乱れ、道徳は地に落ち、人心も自己本位になった。昔楠公は勤王のため立

ち上ったが、その大業も成らなかった。天皇は都から去られその後はたとえば雲霧に四方を塞がれた如くであり、戊辰の年には幕府も反逆するに至った。この時に当り、官軍は決起奮戦して、錦旗の向うところ、東北は平定し、封建は廃せられ、いずこも王土、王臣ならざるなく、学術技芸は盛んに、国威は宜揚せられ、維新は成り、泰平は全国に及び、文明の効は大いにあがった。わが高鍋も戊辰の役に参加し、武藤東四郎・鈴木来助を長として北越東北の野に戦った。種樹公はこの勇士たちの忠誠を深く謝し、戦死者の霊を悼み、万感の想ひをもってこの碑文を書かれた。時は明治七年八月十八日である。

なかでも戦死した鈴木来助は、儒者日高誠実の弟、文武両道の達人で、戦死したのは二七才の若さ、誠に惜しむべき人物であった。この戦役に斃れた一一勇士の墓は谷坂にあり、遠く新潟には、種樹公が書かれた「高鍋藩兵戦死塚碑」が建っている。

### (14) 丁丑戦亡記念碑

この碑は舞鶴公園の石段を北にあがりきった処にある。旧碑は破損甚だしく、終戦後、時の町長柿原政一郎が、旧碑に似せて再建したものである。碑文は儒者城勇雄が書いている。

西南役が起きた時、高鍋は官軍につくか、西郷側につくかで二派に分れたが、郷土の孤立する事を恐れて遂に西郷側に参加した。田原坂の激戦に参加し、各地に歴戦したが、利あらずして遂に官軍に降服した。城勇雄は参戦に反対、その同志と共に一時は苦境におちいったが、戦終ってこの碑文を書く事を請われた時の事情は、この碑文のなかに語られている。即ち高鍋は二派に分れたとはいうものの、その目指すところは同じ正義であり、もしあの世で一同が会い、胸のうちを開き、うちとけて語り会ったならば、すべては高笑いして済ますことであろう。明治一四年仲秋一五日。

この役に参加した者七〇〇余人、戦死者七八人、受刑者二〇人、甚大な戦災を被った。これについては石川正雄の「西南の役と高鍋隊」に詳しい。

### (15) 平林忠恕墓碑

この碑は谷坂墓地にある。長大なもので、篆額（てんがく）を種樹公が、碑文を墓碑銘として城勇雄が撰んでいる。明治二六年二月である。

平林忠恕は秋月藩に仕えた家に、嘉永六年（一八五七）

五月、北平原に生れた。頭脳鋭敏、気性強く、一八の時、藩から選ばられて東京の箕作秋坪等に学んでいる。廃藩以後は学を止めて帰郷し、小学校訓導、地祖改正雇吏、戸長、郡書記を務めたが、経済の志から蚕業を起さんと、明治一三年、高鍋養蚕社を開いた。そしてその長となり、東奔西走、幾多の困難を経て、桑苗、蚕種、養蚕機械を買い、遂には製糸販売を京師、博多に行うまでに至った。明治一七年には授産金を官から借りる事が出来て、高月に授産所を新築し頭取となった。また大分県より養蚕教師を招き、製糸坐繰機械を設けて内容を充実し、他県にも見学旅行をしている。そして新しい製糸業を推進し、旧藩の婦女たちは孜々としてここに働いた。忠恕の勉励勤誘の効は大いにあがった。しかし、惜しくも明治二四年四月、病のため三九才の若さで亡くなっている。この碑文のなかで、城勇雄は彼の死を悼み、忠恕の養蚕に身を捧げた功績を次のように詩の形で讃えている。

谷坂の墓に眠る玉のごとき立派な人物、その見識は卓く、その余沢は郷土を潤している。永久につづく彼の慈しみを思えば、涙が落ちて乾く暇がない程である。

## (16) 坂田稲太郎記念碑

この碑はその墓とともに谷坂に建てられた。

稲太郎は名は師正、字は希貞、文政九年一〇月五日に平原に生れ、明治二一年一〇月二六日に六三歳で亡くなっている。性格は清廉にして無欲、植林をすすめ、郷土殊に地区民の利便をはかった。そして彼は山林業に関心があったばかりでなく、西洋砲術を幕府の砲術家小田平八郎、長崎にて勝海舟に学び、帰郷してから高鍋の藩兵を鍛え、戊辰の役に際しては、藩兵側に多大の勲功をもたらす基礎をつくった。記録によると、碑文は城勇雄が書き、明治二五年一月にこの碑を建てている。

更に明治三三年には、黒水長慥、武藤東四郎初め二一名が発起となって、坂田稲太郎を偲び、偉業を讃えて同地に墓碑を建てている。正面に

坂田先生之墓

背面にその功績が記されている。

また昭和一七年一月には、秋月種英公の碑文で、琴平山（金比羅山）の中腹に頌徳碑が建てられた。

坂田稲太郎翁頌徳之碑

背面に種英公の坂田翁に対する頌徳の文が記されている。

## (17) 長友勘右衛門記念碑

この碑は舞鶴公園の正面入口の石段を上った左側に建てられている。大型のもので正面に

長友勘右衛門君水路功績記念碑

背面に次のように記されている。

長友勘右衛門君、資性勤厚ニシテ志慮アリ。敬神ノ念深ク殊ニ比木神社ヲ尊崇スルコト最モ篤シ。嘗テ我ガ郷潅漑水路未ダ全カラザルヲ見、更ニコレガ開鑿ヲ図ラバ秋収増益スベク厚生ノ策此レヨリ急ナルハナキヲ信ジ、竊カニ意ヲ企画ニ凝ラシ祷請講究スルコト久シ。一夕神託ニ感ジ、豁然得ル有リ。乃チ成算ヲ建言シ、藩公ノ嘉納スル所トナリ且ツコレガ督工ヲ命ゼラレ、欣躍事ニ従ヒ、日夜拮据、遂ニ其ノ功ヲ奏ス。即チ太平寺、畑田、中鶴井手是ナリ。時ニ慶長一七年ニシテ今ヲ距ル三百二十年、現時漑田百八十町ニ及ビ、ソノ地方ノ経済ニ資益スルノ功徳、真ニ景仰措カザル所ナリ。嗚呼君ノ遺業ハ穣々タル稲雲ト与ニ長ヘニ君ノ芳名ハ源々タル水流ト倶ニ尽クルコト無シ。茲ニ関係地主ト胥謀リ碑ヲ建テテ君ノ功績ヲ記念シ、以テ聊カ報本ノ微衷ヲ表スト云爾。昭和九年一月　太平寺畑田中鶴　井手議員。

撰文は神代勝文、筆蹟は岩村眞鉄。

## (18) 本田親潅漑功績記念碑

黒谷の愛宕神社の入口、南脇溝の上に本田親の功績を記念する碑が建てられている。中形の碑で正面に

本田親君潅漑功績記念碑

と刻まれ、背面にその功績の文が記されている。

本田親君、人ト為リ、質宜剛毅、義ヲ見テ起チ事ヲ処スル苟モセズ。夙ニ心ヲ潅漑水路ニ用フ。明治七年畠田井手総代ニ選挙セラルルヤ鋭意任ニ就キ、爾来実ニ六十年一日ノ如ク誠ヲ效シ力ヲ尽シ、今日修治愆ルナク疏導宜キヲ得タルモノ君ノ功与ツテ多キニ居ル。ソノ累生ノ勤労長ヘニ謖ル可カラザルナリ。因ツテ関係地主ト相謀リ碑ヲ建テテ君ノ功績ヲ記念シ以テ聊カ報謝ノ寸忱ヲ表スト云爾

昭和九年一月　　太平寺畑田中鶴　井手議員

本田親（ちかし）は東平原の人で、死後、田ノ上墓地に葬られている。

後はその子親愛（ちかよし）を経て、その孫親徳（ちかのり）に至っている。

## (19) もひろげ神社跡碑

旧二本松坂下の国道沿いを行って、道路脇下の雑木林のなかにこの碑はある。高さ約一メートル四四センチ、幅一メートル六センチの石碑で、二段の台石の上に置かれている。正面に

元茂廣毛神社跡

背面に

昭和五年一二月建之、氏子総代、世話人、発起人の名前が記されている。

祭神は三筒男神で、現在、中鶴屋敷に祀られている。永亨一三年、田部（土持氏）金綱が再興したと伝えられている。神社は毛比呂計神社と呼ばれている。

## (20) 人民牛馬供養碑

町の南端にある欄干橋の脇に、牛馬の霊を慰めるためであろう。古くから石碑がある。現在はあまり目だたないが、昔は周囲が寂しかったせいか、よく目についたものである。表面は風雨にさらされ、摩滅して文字が判読できない。側面の字がわずかに分るだけである。記録によると次の通りである。

正面に

人民牛馬健康記念碑

側面に

明治四十四年二月十九日建之

乗合馬車高鍋駅　営業者一同　佐原勝藏

世話……

昔は街道を駅馬車が走り、荷車も耕作も牛馬が使われていたものである。これに従事した人、牛、馬の労をねぎらい、その亡き霊を慰め、併せて残る馬匹の無病息災安全をこめて建てられたものであろう。

## (21) 畜魂碑

碑は宮越の屠殺所内の庭に建てられている。かなり大きなもので、正面に

畜魂碑

背面に

昭和十年十月二十日建設者　藤本只喜、水本康之、

と記されている。

その脇に小型の碑が建てられている。

南無阿弥陀供養碑

大正四年五月十七日　秦久吉建之

と記されている。

ともに屠殺された動物の霊を弔ったものであろう。

### (22) 軍馬招魂碑

番野地にある農業大学校の門を入って、左手の奥に南面して建っている。正面に次のように記されている。

軍馬招魂碑

軍馬補充部本部長原常成書

背面の碑文は痛みのため明確でない。故老の話によると、昭和一〇年頃、陸軍中佐村上亮によって建てられた由で、終戦直後地下に埋められたが、其後発掘されて現在の場所に再び建てられた。馬政調査会初め、その他児湯郡にある関係諸団体の協力による。軍馬補充部は、陸軍の使用馬を飼育補充する重要な機関で、終戦時までの長い間、この場所に広大な敷地を有していた。この碑は戦争その他の傷病で斃れた軍馬の霊を弔うために建てられたものである。

### (23) 家畜の碑

高鍋農業高校の舞鶴牧場の校庭内に建てられている。碑は高さ一メートル二〇センチ、幅八〇センチの固い自然石である。正面に

家畜の碑

と刻まれている。舞鶴牧場の竣工を記念して、家畜の霊を慰める意味で昭和四一年八月に建立された。

### (24) 精米所跡の碑

高鍋高校内の中庭にある芝生に面して、寝た形で置かれた小型の石碑である。正面に

石井十次先生精米所跡

昭和三十年五月一日設置

と記されている。十次が昔、郷土の産業振興の一端として開設した場所であろう。

### (25) 距離元標

宮田の円福寺より国道筋凡そ二〇〇米の地点にある。

正　面　距離元標　七里　高鍋町大字南高鍋

左側面　高鍋町　九町参拾六間

右側面　廣瀬　参里貳拾四町拾貳間

背　面　明治三十六年七月建之

この元標から高鍋町までの距離は、本町四ツ角の泉屋旅館の角までを示す。元標はこの他に本町四ツ角、坂本坂二〇〇米上った山手側に、それぞれ一基づつあったが現在行方不明となっている。なお西小学校西入口、街道脇に

上江道路元標

が現存している。

以上、高鍋に在る碑について書いたが、まだ豚魂碑（正祐寺畜産団地、昭和四二年建立）、農地整理事業記念碑（耕地整理碑で中鶴地区にある）、蚊口浦水難供養詩碑（蚊口海辺）など多くの碑、その他不明、破損したものがあるが、他日を期して、一先づ筆を擱く。明倫堂跡碑及び琴引松歌碑については、この冊子の「史跡」「名勝地」で紹介してあるので省く。文中の人名は敬称を略した。

△名勝地
△天然記念物
△胸像
△あとがき

（四哲碑）

## 1　琴弾の松

高鍋町東方蚊口浦、宝酒造株式会社西三〇〇メートル、田圃の中、名勝琴弾の松の標柱と歌碑が並んで立ち、一本の松がある。今は昔の物語りの名木の姿はないが、蚊口浦の人には縁の深いものである。その昔をしのびここに先輩の遺稿をまとめてみる。

歌碑は、安田家五代目の祖義門（安田尚義の祖、歌人、絵師）と元の地主綾部長英等代表となり、藩主秋月種茂（七代清観公）に願い出て、その後援によって、建立したもので碑の表面に（高さ一メートル・幅七〇センチ）

しら浪のよりくる糸ををにすげて
　風にしらぶることひきの松

と太文字で巧妙丹念に彫りこんである。　碑は天明元年（一七八一）右二人と松岡博章の三人で建てた旨側面に彫り、裏面には全文漢文で書かれている。歌は日向の国司として在任した、源　重之の作歌としてある。碑文の大意。

「松風が吹くのを静かに聞くと、奥の座敷で琴を弾いているよう聞える、水辺に立つ松の枝は低く垂れ曲っていて、一本の樹のようでなく、源重之の歌ったこの松は、その状長い虹が雨を吸って、枝が重なり、当時は、潮汐がよせて来る所に立っていたのが、今や海岸から隔り、岸に並んで松が生え、歌人・詩人がここに来て漫歩しながら、昔の松を知りたくても、もう誰も知っている者は無く、家臣綾部長英、安田義門これを歎いて起ち、相共に謀って、樹下に石を建て、記録の場を江上庵に設け、風雅の道標とする。我が友、阪庭信義の教によって、石に記する次第である」。

碑文の作者は佐倉藩の儒者渋井孝徳で、阪庭信義の口添え（二人は当時の大儒者）上杉治憲（上杉鷹山公、清観公弟）の意向がその間に動いていると、推測される。

安永一〇年三月碑文作成、碑の歌の文字は、阪庭信義の書になる。義門はこの書を持ち帰り同年五月に建碑した。

地元民の協力で祝賀の祝も賑かに行はれ、柵垣も設けられ次第に有名となった。寛政四年高山彦九郎も高鍋に立ち寄り、碑文を写したと、九州巡遊筑紫日記に収められてある。

○琴弾の松　昭和五年史跡調査報告書に、明治一五年（初代松）頃枯死とある。安永の記録には回り一丈樹令四〇〇年以上と記されてある。

○二代の松　枯死後二〇本位植付けたがその中似た松があったが枯死した。

○参考資料（高鍋町文化財要覧第一集）

琴弾の松

大字蚊口浦芝原に琴弾の松の遺跡があり北隅に碑がある。高さ一メートル、幅七〇センチ、厚さ二八センチの砂岩がある。

表面　しら浪のよりくる糸ををにすげて
　　風にしらふることひきの松

側面　干時　天明元年辛丑孟夏建立
　　世話煎　惣連中　安田義門
　　綾部長英
　　松岡博章

背面　渋谷孝徳の撰文が刻まれている。

## 2　老瀬観音

高鍋町と木城町の境界、老瀬坂山懐、加志揚に老瀬観音滝がある。雄滝・雌滝となり中間岩間に安置されているのが観音像で、石仏に、文政一〇年と銘記してある。

古来この地域で、安産の守り、五穀豊作、難病平癒の仏として信仰厚く参拝の人は後を絶たない。　地の利、環境もよく、夏は涼しく長居もできない仙境である。

最近住民の手で道路も開かれて便利になり参拝者はますます多く、若い夫婦が打連れ安産祈願をしている。

毎年八月二五日は、お祭り日、村民全員総出、仕事も休んでの祈願日・家内安全・五穀豊作をこめた行事で、滝の清水を引用し、婦人の手による「そうめん流し」が終日ある。味もよく、サービス上々、無料、食べほうだいの振舞いで、老若男女近隣の人々が大勢詰めかけ大変な賑わいである。レコードも山にこだまし、昔日の祭り気分で観音滝一帯にぎやかな声がひびきわたる。

その昔は滝の流れで四軒の水車屋（精米所）があった。夏・冬は子供のよい遊び場であった。その流れは元禄の頃（二九〇年前）溜池となり、一〇ヘクタールの水田を潅漑した。新築の観音堂と同行者の高らかな観音経を唱える実況を見るのも一興であろう。

## 3　高鍋大師

大字持田東光寺台地にある。眺望に富む、持田国道十号線、ひんぱんに通る観光バス、ガイドは特に声をはずませて、朗かに説明する。「皆様、はるか向う西に見えます高い山が歌人牧水の尾鈴山の姿であります。こちらの小高い丘が東光寺丘で、丘の上に御堂・大小無数の白い石仏が見えます。あれが有名な高鍋大師で御座います眺望はよく高鍋町が一目に入り、小丸川の清流、太平洋の雄大な姿が見渡されます。あの立並ぶ大きな姿の石仏は技巧も珍奇で、高さ六メートルに及ぶのが九体ありま

す。その前後大小各種の石仏が七〇〇体が安置されてあります。なお東口山腹の階段には、四国八八ヶ所の石仏が並び設けられ、古墳群の丘を護っておられます。

御堂は一一メートル四方屋根瓦葺き、内組は丸木柱を使用、自然木そのまゝに仕組まれています。内部は弘法大師がお祀りしてあります。開山は岩岡保吉翁（五二年一月八八才死去）で昭和九年三月二一日入仏式が行はれました。経費一切自費を投じ、その後同行者の寄進や協力で今日に至っています。皆様ぜひお参り下さい。必ずあらたかなご利益が御座います。岩岡弘覚翁は四〇余年の長い年月「南無大師遍照金剛」を山にこだまし唱えられて来られました。」……

**○開山の由来**（岩岡保吉翁直筆による）

名稱は「東都原古墳供養高鍋大師」とした。昭和四年に古墳盗掘があった。これはもったいないことをしたものだと思い供養をしてあげたいと考え、弘法大師、八八ヶ所を祀りました。

**○石仏安置の由来**

昭和六年ごろから、大分県旧杵から石工を雇い、小丸川原で八八ヶ所石仏の彫刻をはじめた、その傍ら彫刻技術を習い覚えた、堂内弘法大師像も自作安置した。

現在大小七〇〇余体の石仏、九体は六メートルある。

弘法大師、不動明王、稲荷大神、十一面観世音
十二薬師如来、天照大神、　素戔嗚尊岩戸開き
風の神　雷様、　火よけ神　等である。

表参道山腹全体に四国八八ヶ所お札仏が安置されている。これは石工の作であるが、他約七百体供養の塔各種は保吉翁の作である。

**○御堂の由来**

一一メートル四方の建物、瓦葺き、内部組立ては、自然木で節、枝も生かし丸木柱造りで頑丈に組まれ、本尊の弘法大師像も自作である。什物然りである。別棟茶室の設けがある。堂裏地下道五〇メートルは極楽浄土を意味して開削された、莫大な労力と経費を要している。

**○祭　祀**

昭和八年三月三一日安置完了、九年三月二一日入仏式、天神をはじめ、農耕の神、弘法大師、仏教保護の仏を併せまつり、世の中の人々の安泰、神様の恩にむくい、古墳をまつる。とされている。

**○参　考　資　料**

表　彰　状

あなたは昭和八年高鍋町持田古墳の盗掘されるを悲しみこれを守ろうと発起され現地に大師廟建立を思いたち数年をかけて自らの手でこれを

建て古墳の霊を慰めさらに供養の意をこめ石仏を彫り現在高さ一三メートルに及ぶもの四体大小併せて七五〇体の石仏を安置された訪れる人々に古墳の保護を説き続け四十三年の長い間持田古墳を守り文化財保護に陰の力を添えられたことにその徳をたたえ記念品を贈り表彰します

昭和五十一年七月九日

宮崎県観光協会

会長　岩切章太郎印

△　**天然記念物**

高鍋大楠

高鍋城内にある。

国指定天然記念物　昭和二六年六月九日指定

樹令　約五〇〇年と推定さる。

根廻り　一〇・三メートル

目通り　一〇メートル余

高さ　約三五メートル

地上二メートルの所で左右二ま

たに分かる。

昭和二〇年の台風により中心木の先端が枯れ現在の枝ぶりとなり、昭和五四年根廻り補強工事を行った。

県内で珍らしい古木、舞鶴神社境内、旧八幡宮の神木であった。高鍋藩主秋月種長が筑前より移した八幡宮の神木としたがそれ以前土持氏時代からのものであろう。古来五神殿の白山大楠として語り伝えられ、高鍋藩三〇〇年の歴史を物語っている。明倫堂跡も樹下にある。その昔武士、庶民の往来、生活、現在高鍋農業高等学校の沿革、大平寺用水路の由来、何たるを問わず出来事をもの云わぬ人として存在している。樹下一二メートルの往還道を通る人親しく見上げる。西に島田御門東に蓑崎門並に大手門跡堀を見張って頑丈に樹立している。芭蕉の句「夏草やつわものどもの夢のあと」を思い出す。

参考　高鍋町名木紹介

○エノキの大樹　御屋敷荒川章氏宅、県指定沿道修景指定樹木

○ナギの大樹　舞鶴神社境内と筏黒木常吉氏宅、チカラシバと稱し珍らしい大木

○楓樹　西小学校々庭、八坂神社境内にある。

○ナンキンハゼ　高鍋高等学校正門前通学路の並木は並木　見事である。昭和一〇年植樹。

○過去の樹木　○二本松　南九大入口

○天狗松　小丸宮交車庫前

○供養松　宮越地区　蚊口地区

## 斉藤角太郎胸像

県立高鍋農業高等学校正門内側に、斉藤角太郎像がある。

昭和一二年一一月、創立三〇周年記念として、旧農学校校友会によって建立された。先生は、西都市都於郡出身（明治七年六月二九日生）高鍋町南高鍋筏に住まわれた。明治三二年七月一七日、札幌農学校卒業後、三ヶ年秋田県平鹿試験場長を勤められたのち明治三六年（一九〇三）児湯郡立高鍋農学校（現県立高鍋農業高等学校）の開校と同時に初代校長として就任、二三年勤続（大正一五年三月退職）して人づくりの教育に全力を注ぎ多くの有為、有能な人材を養成した。

その中には現在政財界各分野で活躍している人々も多い。

文字どおり、清廉潔白、教育方法も厳格であった。私生活は豊かではなかったが、少しも気にかけることなくひたすら生徒の教育に専念し、堅忍持久の精神と、慈父としての温かい情熱は教え子のひとしく、たたえるところである。胸像は何時もかわりなく、現在の教育の相を見詰め、伝統の農業教育精神を物語っている。

「人は心身共に健康であれば敢えて頭の良否は問うところではない、よろしく懸命に勉強して、時代感覚をわきまえ、将来自身が遭遇した環境には、不平をもらすことなく、自身をその境遇に適応させよ」。とは生徒に常に諭された教訓である。即ち斉角精神、島田精神として人材輩出の因となったものである。

墓は高月の安養寺墓地入口にあり、常に教え子の墓参で香花は絶えない。

## 柿原政一郎胸像

面目一新、新装なれる町立図書館の前庭に、柔和な顔、しかもおかすことのできない姿の胸像がある。昭和三八年一月一四日、柿原政一郎翁顕彰会によって建立されたもので、翁の功績、人格の尋常でなかったことを碑文によって知ることができる。

「柿原翁、名は政一郎、霧仙はその号である。明治一六年（一八八三）この地道具小路に生れた。岡山六高を経て東大哲学科に学び、さらに大原孫三郎、石井十次を師父に、労働問題、社会問題を実地に研究、のち日向土地社長、高鍋製糸社長（大正八年）、四国民報社長、中国民報社長、衆議院議員、広島臨海土地社長、宮崎市長、宮崎県会議員同議長、高鍋町長（昭和一三年）九州茶業社長等を歴任した。その間政治経済面では、広島臨海地帯の造成、宮崎県営電気の創業、鉄興社などの諸工場誘

致、高鍋町、上江村の合併、日向茶の振興と九州輸出製茶会社の新設、南九州化学工業会社の設立など。

社会文教面では、大阪スラム街青少年の教学保育、高鍋藩本藩実録の筆写、大原社会問題研究所の開設運営、茶旧原孤児院の後見、岡山の茶祖栄西禅師賛仰会の設立、広島の戦災供養会の結成、本県の石井記念友愛社、財団法人正幸会、高鍋町図書館、明倫文庫の創設、石井十次伝記の刊行など幾多の不朽の功業がある。その外隠徳の美挙も多かった。

翁は祖父正幸が西南の役に殉じたゆかりもあって、特に西郷南洲を崇拝した。翁がいつも理想と人道に若々しい感激を失わず、国士の面目躍如として、ひたすら公共奉仕の大精神に生き貫ぬき通したことは、大西郷に負ふところが多かったのであろう。

郷土の要請に応えて、気軽るに首長の任に着いたのもまたその都度報酬を辞退したのも全く奉仕の精神であった。　高鍋町名誉町民、宮崎県文化功労者、全日本社会教育功労者、従五位勲四等瑞宝章等、昭和三七年一月一四日永眠、同月十四日町葬」

享年七八才を一期として地下に安らかに眠る翁の最期の念願は死ぬまで高鍋町図書館長でありたいということであった。

○墓は新富町湯風呂にある。

○柿原政一郎伝（荒川如矢郎著、柿原政一郎翁顕彰会発行）

**石井十次鋳像**

高鍋西小学校（旧上江小学校）前庭玄関前に、石井十次の鋳像がある。鋳像銘文は、

石井十次先生像、昭和三九年四月一日、生誕百年記念

「天は父なり人は同胞なれば相信じ相愛す可き事」

設立　昭和四〇年三月三一日

鋳像は、静かに、西小学校の毎日の教育を見守りながら、五〇〇メートル隔たる馬場原生誕の家、馬場原朝晩学校跡、高鍋町、太平洋、岡山・茶旧原孤児院、全世界を見守もる姿である。

この鋳像は石井十次の心をくんで、西小学校の教育精神とされている。石井十次生誕百年を記念して、当時の校長松浦三州が、児童その他特志の後援と浄財で建立した。

救世の偉人十次は百年前に生れ、五十年間を専ら恵まれぬ人を救う事業に取組んだ。現在茶旧原にその事業、人格を記念するための社会福祉法人石井記念友愛社がある。理事長は児島虎一郎氏で、石井十次の孫にあたる。

高鍋駅東方に「孤児の父石井十次」「石井十次誕生の地」記念碑も建立され生家も保存されている。墓は茶旧原にあり、一志同行の人々の霊も安らかに眠る。毎年一月三〇日の命日には参拝の人で墓前はうずまる。今も昔もかわらぬ愛の真心は尊く輝いている。

石井十次の歌

（安田尚義作詞、加藤二郎作曲）

一　村の祭に縄の帯、しめたる友をいたわりて、
　母の手織りのつむぎ帯、とりかえやりし少年の
　十次の心のびてゆく

二　巡礼の子を救いたる。医学生十次、医書を焼き、
　三千の孤児の父となり、神にささげた生涯は、
　岡山孤児院の名は朽ちず

三　茶旧原の開拓に、労働自治の人づくり、
　孤児教育の理想郷　きずきてここに眠りたる
　石井十次は世界の偉人

## あとがき

調査資料は僅かながら集めたが、文章にまとめることは仲々むずかしい。表現もまずく、やっと別記のものができた。

資料は、既刊文化財要覧を基本に、石井十次伝各種。柿原政一郎伝（荒川如矢郎著）日本教育百年史（玉川大刊行）高鍋農高校友会誌、橋口　淳先生、三輪丈作先生金沢土雄氏の御協力によってまとまった。厚くお礼申し上げる。

## 池　堤

### 一、はじめに

天正一五年四月秋月種実、種長父子は秀吉に降参したものの幸に日向財部に転封されたのは、秋月家が大和朝廷以来の名門だったからだとも言われている。その後秀吉の朝鮮出兵に従軍したり、秀吉の没後、関ヶ原の戦に当初西軍に加り後、家康に降る等席の温まる閑もなく、財部入城以来二〇年たって漸く城の改修、野首の堀切り工事に着手したことになっている。三代種信公の時財部城は近世的な城としての普請がはじまり、お堀もこの頃完成した。元禄二年種信が隠居して、四代種政公の時代になって始めて土木工事が行われるようになり、谷坂の堤を始め山王堤、檜谷堤が完成するに至った。

### 二、谷坂堤

大字上江字谷坂

元禄五年（一六九二）正月一六日着工し翌二月三日完成。延人数九二三人。普請奉行に河内山清八、河野五郎

右衛門、松岡中助が命ぜられている。高鍋藩としては食糧の増産が何よりも急務であったので、農業政策に積極的に取りくんだものと思はれる。耕地面積の拡大のためには、水利の助長が必要となり、貯水池、用水路の開発が行われるようになったのである。谷坂堤は高鍋藩最初の堤として完成した。

**三、山王長法寺（長宝寺）堤**

大字上江字山王

元禄七年（一六九四）七月二九日完成している。奉行河内山清八、人足五、〇〇〇人、高鍋藩最大の堤である。大泉篤範氏の資料によると長宝寺は慶長三年（一五九八）法印舜覚が真言宗高月寺の末寺として開山したが、当初から住職に恵まれず無住時代が多かったようである。

天保五年以前に廃寺となっているのに、明治四年にも廃寺となっているのは、建物すべてが廃棄されたのであろう。

**四、持田檜谷堤**

大字持田字檜谷

元禄一四年（一七〇一）一〇月着工、延人数二九七五人。檜谷堤の改修は度々行はれたようであるが、最近では昭和四一年、昭和四五年と大改修工事が行はれ、現在は俵橋から鴫野に至る二六〇町歩の美田に潅漑していると、昭和四一年の改修記念碑に刻んである。現在は養魚場として水利組合が管理している。

**五、雲雀山堤**

大字南高鍋雲雀山

宝永四年（一七〇七）一月一五日着工。奉行中元寺庄内、久場源内、御目付後藤喜平次、人数一〇四九人、この頃都では元禄文化の花開いて、奢侈に流れている時、都から遠くはなれた日向の小藩では、営々として、土木事業に精魂を傾け、高鍋藩の黄金時代の幕明けの時代であったと思はれる。

以上が高鍋の堤の代表的なものであるが、その他羽根田堤、家床堤、小薄堤、老瀬堤、等については、資料がなく詳細不明であり、後日の調査を待つことにしたい。

（安田尚義著高鍋藩史話による）

## ◉用水路

**一、はじめに**

高鍋藩では秋月氏が高鍋に居城以来戦争や内紛が治まるにつれて、積極的に建設が進められ、第四代種政の頃から特に農業振興策として耕地面積の拡大がまず計られ開田開畑が盛んに行なわれた。特に七代種茂清観公の治世には盛んに開田の進むにつれて水利の助長が必要とな

り貯水池や用水路の開発がしきりに行なわれた。

町内では高鍋低地をうるおす太平寺井手が最も古く、ついで広谷用水路や上江山下のほりぬき水路等は記録に明らかである。この外町内には堀の内や雲雀山の水路、竹鳩の水路、切原から持田高河原をうるおす水路、川南通山を水源とする鴫野までの浜井手水路等があり、いずれも先人の苦心によって築かれたものであることは想像されるが詳細の記録を欠くのは残念である。

高鍋藩の古い水路で見逃せないのは橋はすべて串間産の砂岩が用いられていたことで、この石材は砥石（とじし）に適するので農民の鎌磨ぎ用にする意図であった。これは高鍋藩農政の特色の一つであったが最近はコンクリートの発達によってその影が失なわれた。ただ高鍋農業高校庭（大楠下）の明倫堂跡碑の礎石はこの串間産の石材が使用されている。

## 二、太平寺畑田用水路

俗に太平寺井手と称され、太平寺から市の山川の水を通し、脇より蓑崎（みのさき）に出で城内に入り、舞鶴公園大楠の下を過ぎ、一部は城堀に水を供給し（現在は閉鑽）黒谷の愛宕神社下や役場前で支流を分岐し、本流は畑田に通じ、その蒙利区域は宮越・中鶴方両の田んぼに潅漑して大旱にも美田をみのらせている。

この井手は長友勘右衛門により開かれ、高鍋藩でも最も古いもので記録には慶長一七年春と記され舞鶴公園にその記念碑（昭和九年一月建立）がある。記念碑の碑文、勘右衛門の略歴等については高鍋町文化財第二集高鍋城の記念碑の項に記載せられている。

## 三、広谷用水路

小丸川を利用すればその効果大なることに着目したのは、しばしば干ばつに悩まされた清観公であった。公は豊後竹田藩より人を招き実地調査の上、広谷用水路計画を作った。比木神社でその起工祭が行なわれたのは天明二年（一七八二）九月のことであった。しかし六年後公は病のため退隠し江戸に留ったのでこの事業は成功を見ずに終った。現在の広谷用水路は明治末年から木城村（町）の山口弘康等によって巨大な費用を投じ、多くの犠牲を払って工事が進められ、明治四五年七月成功したものである。

## 四、佐久間土手

現在の高鍋西小学校東から小丸出口に至る堤防を俗に佐久間土手と称する。

これは高鍋藩の軍師佐久間頼母の仕事として今に残っているもので、佐久間頼母は有閑斉と称し、越後（謙信）流兵学の大家で種信公が江戸で招聘し、元禄六年（一六九三）に高鍋に下り城内で兵法を講じた。

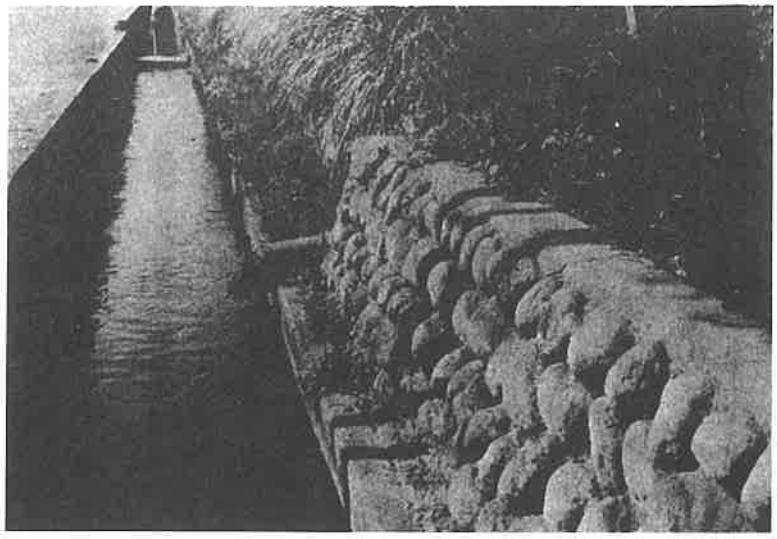
頼母はそれより約十年高鍋に在り、その間、毎年台風の襲来によって小丸川に洪水が起るごとに旧河道（平原の南に小薄の池というのがあったがこれは往時の小丸川旧河道跡池）を伝って高鍋城の大手まで氾濫するのを防ぐため構築したものである。西小学校グランド東を水除（みずよけ）というのはこれから起った地名である。

## 五、筏の火防用水路

本藩実録に初めて火防のことが出てくるのは元禄五年（一六九二）三月で三名の定火消役、つまり消防職を任命している。

それより一四年後の宝永三年（一七〇六）正月に初めて消防使が置かれ、火消しの編成、用具が示され又町内へ水溜堀八ヶ所が作られ、水溜堀に遠い所には大桶四つを置くなど当時としては周到な用意のほどが見える。

その翌宝永四年（一七〇七）筏小路の大坪甚右衛門、園田孫之亟、沢辺団右衛門、堤団之進、武末（後の武藤）勘右衛門等の屋敷裏に火の用心の水路を通すよう願出たのが許可された。但し水田用水の妨げにならぬよう、八月から二月までと制限をつけた。この水路は現在の四季亭の北側水路で東に行き間もなく右折して石川旅館の横から旭通を南に横切り、横筏の永友医院の西境を経て火産霊神社の境内を抜け黒木家の西を通り筏通りを横断し元のお仮屋（今の則信商店）の西を経て南走し末は水田に注いでいる。のがそれである。



（現在の大平寺用水）

## 編集後記

高鍋町における歴史的文化遺産に対する保護顕彰の気運が今までになく町民各層の中に高まっていることは、私どもの深く喜びとするところでありその事業の推進に責任を痛感している次第であります。

昭和四九年三月、高鍋町文化財シリーズ第一集「高鍋町文化財要覧」に続いて、第二集「高鍋城」第三集「高鍋の無形文化財」更に高鍋の古墳を発行し、このたびは第五集「高鍋の史跡」を発行し一般に供することにしました。

執筆は、別に紹介しましたように、高鍋町文化財保存調査委員の先生方にお願いしました。文献をひもといての資料収集や現地踏査など大変なご苦労の上に集成されたものです。実際に直面されると容易なことではなかったかと思い無上の謝意を表し編集後記といたします。

高鍋町教育長　日高　俊

## 執筆者及び参画者所属名（執筆順）

| | |
|---|---|
| 高鍋町文化財保存調査委員長 | 石川正雄 |
| 高鍋町文化財保存調査委員 | 武藤重勝 |
| 高鍋町文化財保存調査委員 | 小椋美義 |
| 高鍋町文化財保存調査委員 | 前田新一 |
| 高鍋町文化財保存調査委員 | 黒水　渉 |
| 高鍋町社会教育課長 | 多賀進司 |
| 同課長補佐兼文化敗係長 | 本部　寛 |
| 同社会教育係長 | 矢野博美 |


高鍋町の文化財　第五集

**高鍋の史跡**

初刊　昭和54年3月
第2回　昭和61年3月
第3回　平成30年3月

発行　高鍋町教育委員会
編集　社会教育課
高鍋町大字上江8335番地
TEL（0983）23-3326